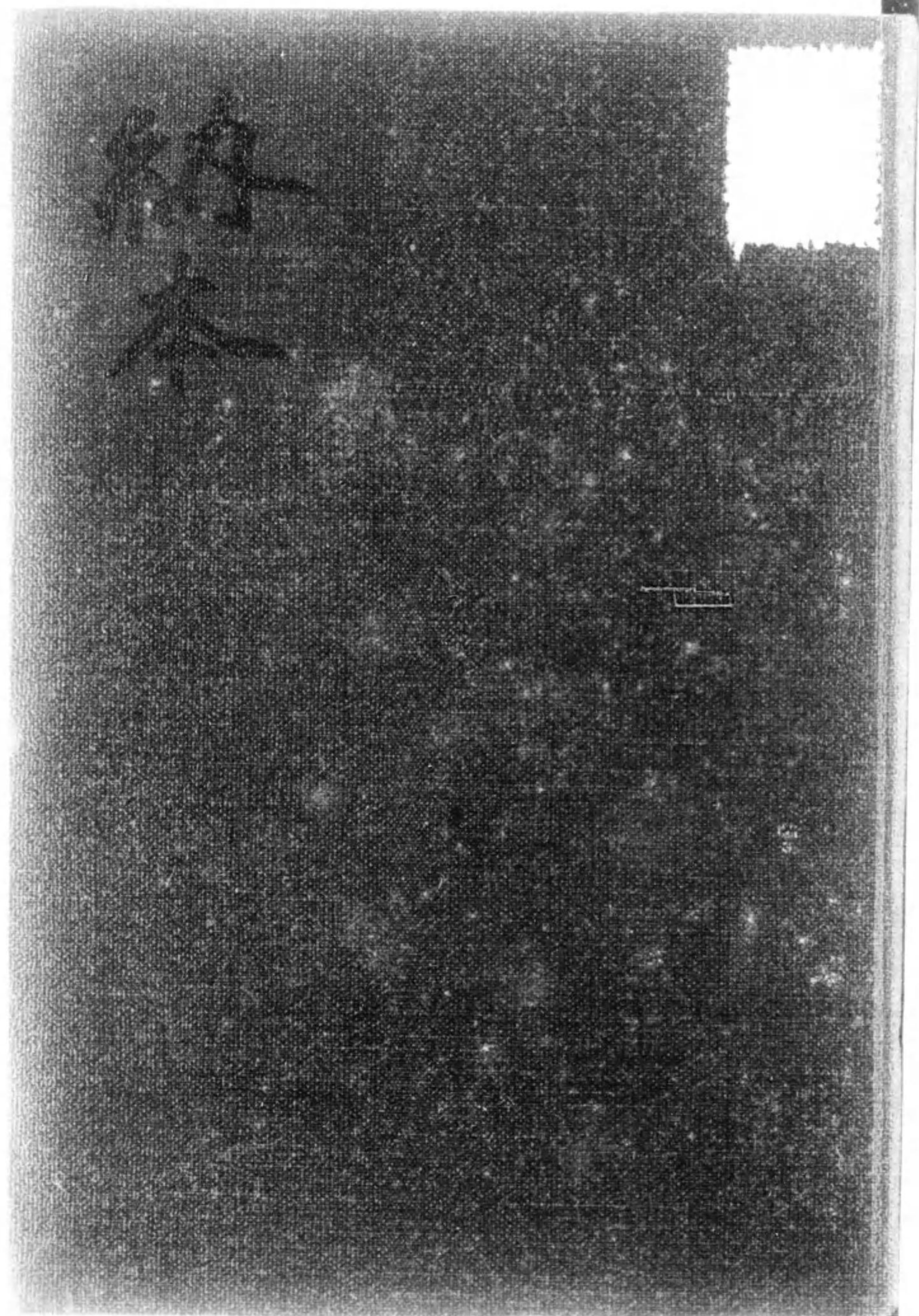


364
315

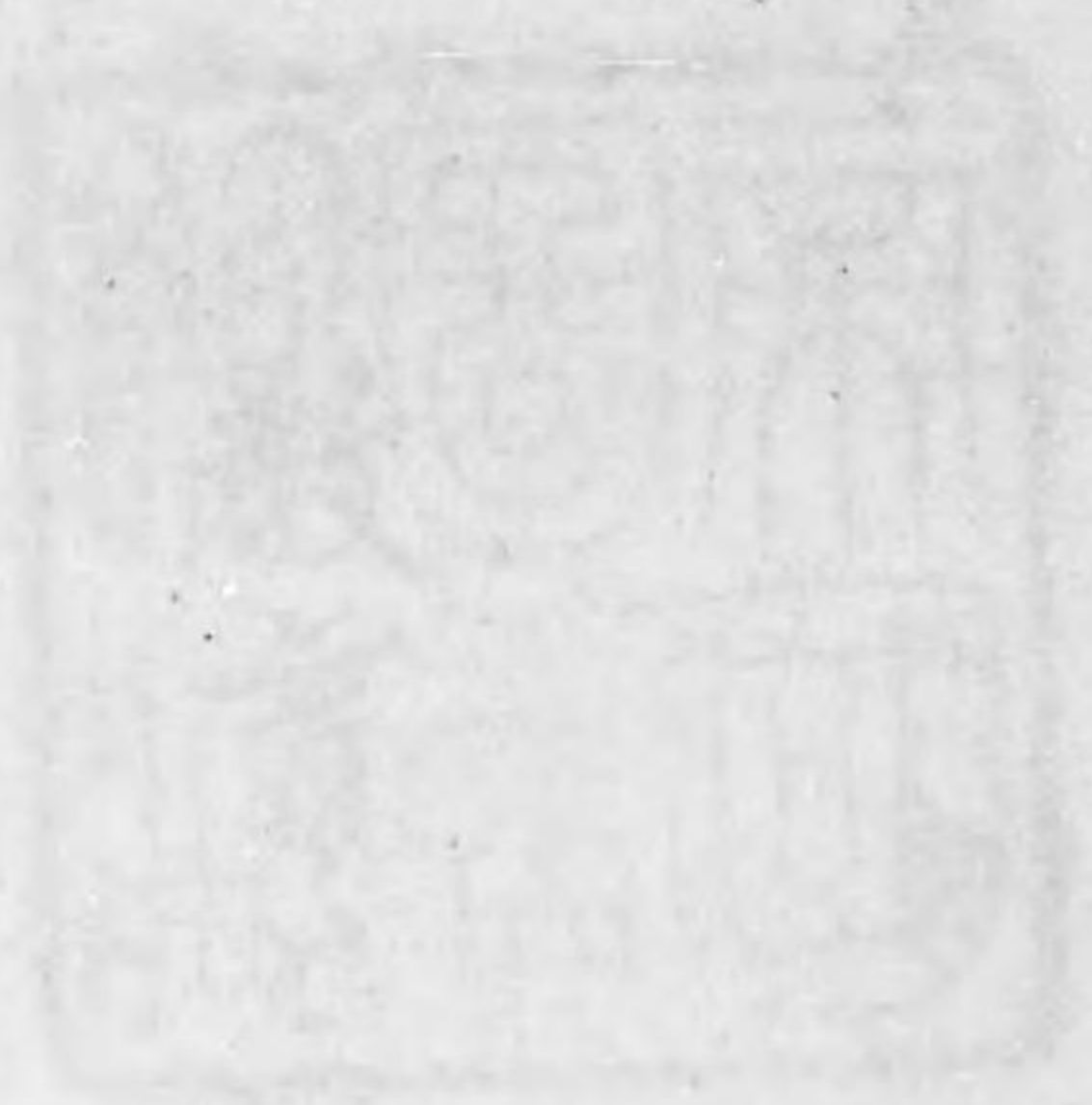


始

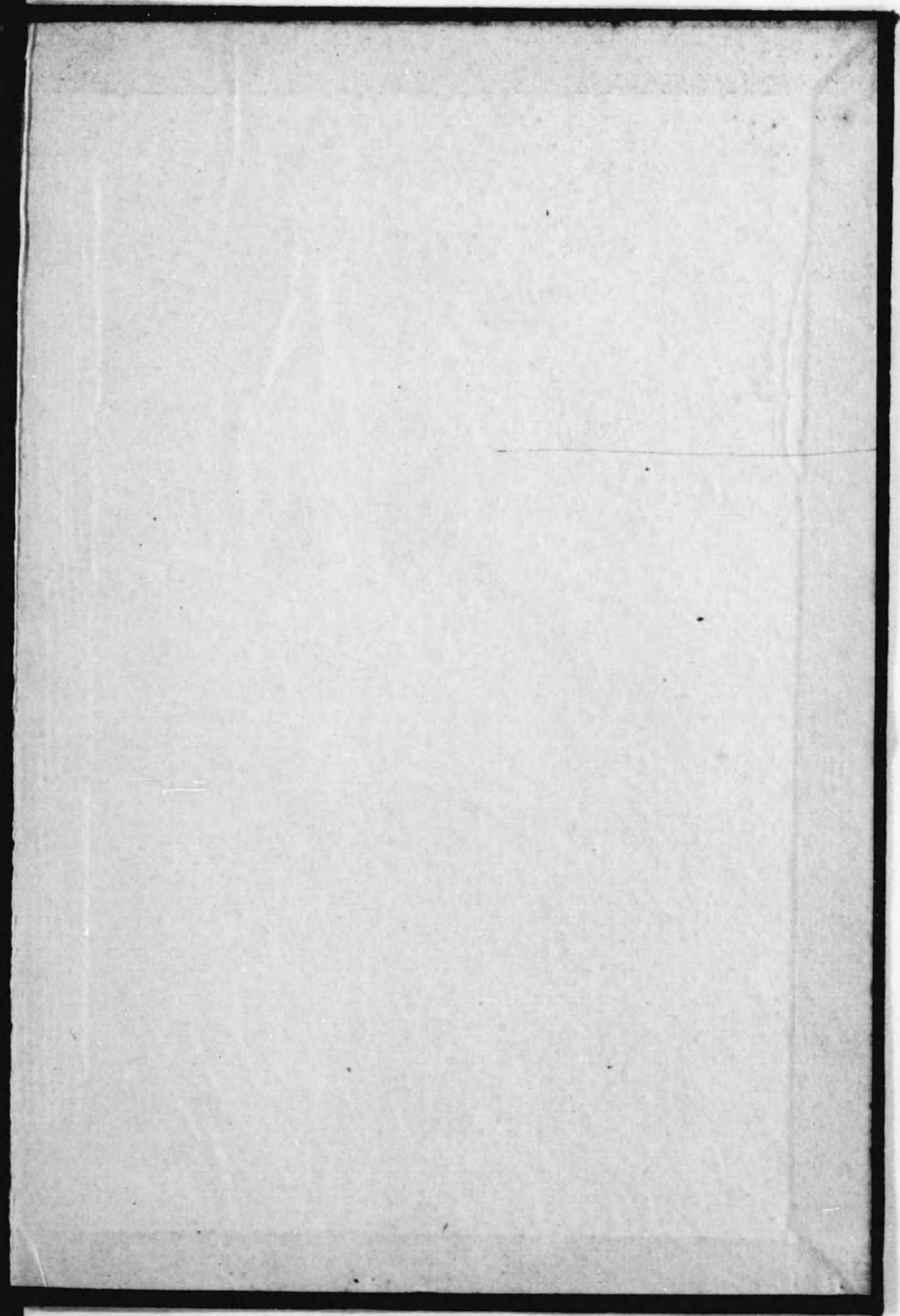




346



Faint vertical text or characters.



特234
291



神靈學

吐
星
堂
發
行



序

教育なる熟語は孟子に「得天下英才而教育之」とあるのが其の語源であると云はれてゐる。即ちその内容は儒教的教養を與ふることを意味してゐるのである。併し今日我國に於て用ひられつゝある教育なる熟語は、孟子に謂ふ所の教育とは其の意義に於て大いに異なるものがあつて、英語の Education の翻譯せられたものである。語源はラテン語の Educare であつて、その意味は引出すといふことである。

而してこの翻譯語は明治維新後に於て廣く使用せらるゝに至つたものである。

故に西洋の語を翻譯せる教育なる熟語の意味の下に行はれ來つた、明治維新以來の教育なるものは、我國固有の大和民族性に立脚せるものではなくして、唯歐米の教育を模倣したに過ぎぬのである。而して此の歐米の教育なるもの、最初の出發點は物質的一元論的である。

斯の如くして我國の教育なるものは、我國祖先傳來の慣習を破つて、當時我が國民に最も缺乏し居りし物質科學的

知識をのみ劃一詰込主義を以て教育したのである。其の後歐米人も次第に所謂二元論に傾き、遂に物質的教育と相俟つて精神的教育の必要を感じるの傾向を生ずるに至つた。従つて我國に於ても亦修身教育なるものが大いに叫ばるゝの勢を馴致し來つたのである。併し乍ら其の精神教育たるや飽くまで歐米の夫れを模倣せるが故に、其の修身の教育なるものも、我國固有の民族精神を培ふ上に於ては風馬牛何の關する所は無いのである。かくて五六十年を経過したる今日に於て、次の如き著明なる現象を見るに至つた。

それは即ち我が國移民者の特性である。我が國民は何れの國に移民するも決して大和魂を失はず、移民地に於ける他民族とは容易に同化せぬのである。彼等移民は己が曾て文明國とし又先進國として尊敬せし外國に移り住みながら、移民地の他民族とは決して同化しようとはせぬのである。獨り其の移民者に於てのみでなく、其の子孫も亦然りである。是れ民族の同化なるものは靈的に魂の同化によつてのみ行はるゝものであるからである。

同化による變化は精神症狀を矯正教育することによつて

變化するものとは、根本的に意味を異にする。即ち同化なるものは精神の本體即ち魂そのものゝ變化であるのである。此の精神の本體たる魂の變化を起さしむる同化は、民族をして其の民族性を變化せしむるものである。従つて精神症候に變化を呈するに至るは自明の理である。同化によらざる模倣によつて變化する精神の症候なるものは、其の精神の本體たる魂に何の變化もなきが故に、到底他民族との完全なる融和は出來ないのである。

我國に於ける歐米流の教育には、此の魂教育同化の作用

はなかつた。而して其の結果が今日我國の移民に於て現はれて居るのである。

人をして精神の本體即ち魂の活動の修養を爲さしむるの道は、實に教育の根本義である。故に眞の教育なるものは、物質科學と非物質科學即ち精神教育とを並行的に行はねばならぬのである。

上述の如く我が國民は明治維新以來物質科學の知識をば一舉に歐米人に劣らざる程度にまで獲得したのであるが、其の反面精神的方面に大々の缺陷を生じたのである。即ち

國民精神の不統一は此處に胚胎して居るのである。

然らば如何にせば、此の精神教育の缺陷を匡救是正すべしか。他なし、そは神靈研究に在り。之れ本著に於て教育と神靈學を詳説せる所以である。

現時の非常時局に際しては、實際に於て我國の教育者に物質科學的知識の教育と共に、非物質科學即ち神靈學的の知識を有たしむることは焦眉の急務でなければならぬ。要するに現時は、進歩したる物質科學をば、大和魂を以て大に活用せねばならぬ非常の時であるのである。

本書に於ては主として教育家諸君に大和魂の本體及び其の活動變化の状態を理解せしめんが爲めに必要なる非物質科學の一般を説述した。併しながら著者元來文章の才能に乏しく意餘りありて筆の之に伴はざるを悲しむ。希くは本書によつて、眞の教育の何たるかに就いて覺醒する先覺的教育者の出づるあれば、獨り著者の幸のみではない。

昭和九年盛夏

著者識

教育と神靈學

目次

序	一
各論	一
一、靈研究	一一
二、精神の本體	一六
三、精神本體の組成	二〇
四、人と動物との區別	二六
五、非物質科學の研究	三八
目次	一

1. 幽界……………四四

2. 妖魅靈界……………四七

3. 佛魔界……………五〇

4. 神仙界……………五三

5. 神靈界……………五七

六、精神文化と靈研究……………六〇

1. 物質科學的の靈研究……………六〇

2. 非物質科學的研究……………六八

七、祖神の研究……………七四

1. 神……………七五

2. 神と民族との關係……………八一

八、同化と血液型……………一〇四

九、アイヌ民族……………一二八

一〇、大和民族……………一三三

一一、人代記……………一四六

一二、佛教傳來……………一六五

一三、三種の神器……………一七二

一四、神社……………一八二

一五、神……………一八五

一六、信仰の中心と國家の中心……………一九一

一七、護國の鬼……………一九六

イ、儒佛渡來以前……………一九七

ロ、儒佛渡來後……………一九九

ハ、正式神道奉祀後……………一九九

一八、教育と信仰……………二〇二

一九、敬神崇祖の實行……………二〇九

二〇、我國宗教の意義……………二一四

二一、個人主義……………二一九

二二、信仰と祈願禮拜……………二二五

二三、教育者……………二三一

教育と神靈學

總論

神靈學——敢て神靈學と謂ふ。神靈學を眞に理解せんがためには、先づ神靈學の初歩をなすところの靈學を研究せねばならぬのである。種々なる靈學、殊に近時人々によつて唱道せらるゝ靈學の如きは神靈學に入る手引の役目を爲すものである。日本國人にして神靈の現存に就て知識を有するものは、よく我は神國の民なりと云ふ。即ち神靈の坐ましますことに就て何等かの言傳いひつたへを聞いて居るのである。此等の人は、多くは更に神靈の實在を科學的に、如實たゞじつに確認せんとする希望

を有するのである。併し世には斯る希望なくして、只單に靈學のみの研究を行つて居る者もあるのであるが、之は百害あつて一利無きものである。

然るに歐米諸國に於けるが如く、又我國一部の科學者の如く、物質科學の發達に専念して非物質科學を排除し、神靈の實在を信せざるのみか靈の存在さへ知らざる人々もあるが、元來宇宙は物質及び非物質の兩世界より成り、物質界は非物質界の中に出來て居るものである。故に物質界のみを研究して居るものも、終には非物質界の存在に氣付くに至るものである。又之に反し非物質界の現象を主に研究して居たものも、物質界との關係を大いに認むるに至らざるを得ないのである。

近來歐米の物質科學者の中にも、次第に非物質界の靈體に就いて實驗證明せんとするものが出づるに至つた。また日本に於ても近時物

質科學の知識を相當に有して居るものにして、靈界研究に指を染むるものあるを見るのである。併し其の研究實驗方針に至つては歐米人及び日本人の兩者の間には自ら^{おつか}差違あるを免れぬのである。即ち歐米人は靈的現象を物質化せんとし、日本人は靈的現象を以て物質現象の或る不明の點を説明せんとするのである。茲に物質科學本能の國民と、非物質科學本能の國民の差異があるのである。元來日本人は非物質科學本能の國民であるに拘らず、近年歐米心醉癖より、歐米の物質科學者等が発見し驚異せる靈界現象が、物質科學化されて研究せらるゝことの漸く旺^{さかん}ならんとするを見て、之れに共鳴して靈研究を爲すものがあるのである。此等の人は歐米人の如く、靈の存在を證明するが爲め努力するのみであつて、進んで神靈研究にまで飛躍しようとはしないのである。眞に神靈の存在を信じ、靈を介して神靈の研究に進む

ものゝ如きは洵に尠いのである。蓋し下級なる靈は、實に千態萬様な現象を現はすものであつて、單に之れを研究せんとせば永久に唯種々なる靈現象を反覆實驗するのみであつて、如何に之を試むるもこれ以外に出づること能はざるのである。

今日世人は一般に物質文化と精神文化との區別を明かに認識し得る様になつた。初め物質文化の存在のみを知つて、他には何物もないと信じて居た世の人々が、あらゆる方面に行詰りを感じたる結果、遂に精神文化の存在することに氣付くに至つたのである。生産工業の如き單純なる物質的事業も、獨り物質文化を以てしては自由に成功する能はず、其の間に精神文化が偉大なる威力を發揮するものなることが、漸次認められ、今や物質文化國に於て大いに反省せられんとするに至つたのである。

此の關係よりして、我國に於て先づ考ふべきことは教育に就いてであると思ふ。兒童の教育は國家事業としては最大事業の一つである。國家の事業中に、巨大なる國費を費すも容易に豫期の成績を得られざるものは數多ある。併し其の多くは直に其の成績如何を知り得るのである。よしや失敗に終つても直に之れが對策を講せられ得る。然るに獨り兒童教育事業に至つては、其の效果如何は成年後に至つて始めて現はるゝものであつて、而も其の良否は容易に認定し得ざる性質のものである。

元來兒童教育に方つては、物質及び非物質的文化の教育、換言すれば物質教育及び精神教育を併せ行はねばならぬものである。然るに明治維新後の我國の兒童教育には此の兩者の併行施設と云ふことは、當局者に忘れられたのである。併し其の之を忘れたるは、決して人の罪

にあらずして全く時代の罪であつたのである。

六

而して又明治維新前の我國の教育と雖も、當時既に我が大和民族固有の精神教育ではなくして、儒佛の輸入によつて著しく變化した精神によるものであつた。然れども猶其の教育の根本は精神文化的教育であつた。其の形式は寺小屋の如き實に不完全なる教育法によつて行はれたものであつたが、其の主旨に於ては精神的教育の本體を存して居たのである。之れに反して今日の兒童に對する普通教育は、物質科學の教育を主として、精神教育をば殆んど顧みぬのである。

併し明治維新當時、俄に取入れたる歐米の物質文化に眩惑されて、日本固有の精神教育を顧みぬ傾向を次第に馴致したことは、已むを得ないと云へば云へるのである。即ち微々たる精神教育のみを僅かに蒙つて居たものが、突然歐米の燦爛たる物質教育の成果を見せつけられ

たのであるから一にも西洋二にも西洋、と西洋心醉に陥るに至り、之れを模倣せずには居られなかつたのである。而も當時此等の人々は、其の結果が今日の如く物質教育の弊害百出となるに至るであらう事を想像し得られなかつたのである。歐米に於ても今では、國民教育をば單に物質主義の教育のみによつてしては、何れも皆恐るべき惡結果を生ずるものであることを認めて居る様である。併し其の原因を正確に認定することは今猶容易ではないのである。此の原因を認むることに於ては、純物質的教育のみを行ひたる國と、精神教育を行ひつゝ、物質的教育に轉換したる國とは大いに差異あることを見るのである。

茲に歐米人は物質教育のみを知つて、眞の精神教育の價値を知らざるものであると云へば、人或は云はん。歐米人も決して物質教育のみを行ひたるにあらず、精神教育はなして居たと。即ち基督教の「ゴッド」

七

と稱する理想神を以て精神教育を施して居るではないかと云ふであらうが、基督教の如き理想神を信仰する理想的宗教は、決して眞の精神教育ではないのである。眞の精神教育とは敬神崇祖の信仰に基く處の民族教育でなければならぬのである。基督教の如きは、實は之れ物質科學的理想宗教であつて、眞の神の教ではないのである。又其の所謂神に就ても、非物質界に於ける實在を認識し得るものに非ずして、唯空想的に之を設けて、以て精神教育の目標とせるものである。又支那の儒教の如きも眞の精神教育ではないのであつて、此の教育を受けたる國民が物質科學的の教育を受くるときは、物質科學的の知識を以て精神教育の實行を圖るのである。要するに此等は物質的にあらず精神的にあらざる一種の詐僞的文化を招來するものである。

之れに反して我が日本國民の如き、眞の精神教育たる民族魂的教育

を蒙りて、大和魂の眞意義を知りたるものは、外來思想の侵入によつても、決して大和魂を消失し得るものではないのである。眞の精神教育とは人の精神たる魂の教育であつて、人の精神即ち魂をして非物質界の神靈と交渉を持つ様にするのである。即ち眞の精神教育とは信仰によつて此の精神たる魂と神靈との關係を密にし、魂の性質を變化せしむることを爲すを云ふのである。此の意味の精神教育は民族魂即ち國民の靈精神の明かなるものに於て先づ行はるゝものであつて、歐米諸國に於ては容易に行はるゝものあるを見ざるのである。

故に眞の國民教育とは斯の如き精神教育と物質教育の併立したるものを云ふのである。人が教育を受くるに當つては、如何なる種類の教育を受くるとも、其の物質的及び非物質的の教育を受けねばならぬものである。人間としては皆物質界及び非物質界に關係をもつて居る

のである。故に物質界あるを認めて、非物質界あるを信せざらんとするものも、教育上には知らず識らず、非物質界的現象即ち精神現象の教育の必要を認むるに至るのである。故に教育學に於ては特に精神現象を詳細に認むる必要があるのである。然れども元來歐米諸國の多くの學者等は、物質界から非物質界を観察せんとするのであるが故に、單に想像に終らんとするものは尠くないのである。

私は今之れに反して、非物質界即ち靈界より物質界を観察して得たる教育學に就て少しく論述せんとするのである。素より私の非物質界的研究は未だ完璧の域には達して居ないのであるが故に、今後尙ほ大いに研究を續行せんと欲するものである。

各論

一、靈研究

靈研究は我國の如く神代の現象が歴史の上に明かに記載せられて居る國に於ては、其の現象を解釋する上に於て、之れを必要とするものである。之に反して物質科學を以て主體とし、非物質界の存在を排斥せる國民間に於ては、稀に靈的現象の存在することに氣付くことなきに非ざるも、科學的に之を説明し得ざるものをも之を非物質の靈的現象とせず、不明の物質現象であるとし、必ず將來物質科學的に闡明し得る問題として落着せしむるのが通例である。

此の種の物質科學者の誤りたる觀察は、我國の學者にも傳播して居

るのである。此の觀察の誤は物質文化第一主義のものとするものである。即ち明治維新後物質文化に心酔して精神文化を忘れたるものには、斯く歐米人の如き觀察を爲すものがあるのである。然るに精神文化の相當發達して居つた我國に於ては、物質科學者の不思議とする靈的現象は常に頗る多數に發現するのである。故に我國に於ては一方に物質科學の大いに開發せらるゝと同時に、他方に於て精神科學に屬する靈研究は實に盛に行はれたのである。併し現時は靈研究者の知識及び其の機能は物質科學者の其れに及ばざるものがあるが故に、兒童教育に従事せる教育者等には深く之れに没頭研究することは許されざるものゝ様である。

元來教育なるものは物質科學的教育にのみ偏すべきものではなくして之と同時に非物質科學的教育即ち精神的教育をせねばならぬも

のであるが、抑も精神的教育なる言葉は、其の觀察の方面の異なるに従つて二種類の意味があることを見るのである。其の觀察の方面とは物質界あるを知りて、非物質界あるを信せざりしものが、漸く物質界の彼方に非物質界があるならんと考へて唱ふる精神教育と云ふ意味と、最初より非物質界現象に關する知識を有するものが、物質科學の蘊奥を極めて後唱ふる、精神的教育と稱するものゝ意味の相違である。前者は精神の本體に就ては知ることなく、精神の發する種々なる現象を見て唯漠然と精神なるものは存在するものであるとし、精神教育を稱するのである。即ち其の精神的教育なるものは精神現象の末梢的教育であるのである。例へば危険思想に侵されたる場合に於ても、其の思想の危険性を帯びたる部分に對する對症療法的教育を行はんとするものにして、其の危険思想の發生する根本原因に就ては更に探究せん

とせぬのである。凡そ物には結果あれば必ず原因ありと云ふ物質科學の原則あるを知りつゝ、精神問題に關する限り此の理を悟り得ぬのである。後者は之れに反し、精神の本體は、魂なることを知るが故に、種々なる精神現象の發生に就き精神の本體の變化を知りて教育を行ふ眞の精神的教育であるのである。

我國に於ても近くは明治維新當時より、國民は物質科學の模倣まほうにのみ熱中したるが故に、非物質界の研究を閑却かんよくしたのである。而して歐米の物質科學者等が、其の初期の時代に於て、非物質界などはなきものとし、非物質現象などは、盡く物質科學的に説明出来るものとせるを模倣して、教育方針を制定したのである。即ち我國の教育法中の修身科の如く、精神現象教育を主とするに至つたのである。

併し此の物質科學的精神教育法を以てしては、精神の本體の變化に

對して効果なきものであることを認めて、今日では識者は精神教育法の改善を叫ぶに至つた様である。

故に現時の教育法の改善としては、教育者をして先づ非物質界即ち靈界の事情を會得せしむることが急務である。靈界の研究をなすことによつて精神の本體なるものを明かにせねばならぬのである。

一、精神の本體

一六

國民が物質科學のみを信せずして、非物質の世界即ち靈界の實在を信する國に於ては、其の靈界に於て活動せる靈體の歴史的記録を必ず有するものである。試に我國の神典古事記を通讀せば、神代に於て神靈活動の歴史を最も明かに認め得るのである。非物質界の實在を信するものは此の歴史を通讀して之れを認識すれども、物質界あるを信じて非物質界あるを信せざらんとするものは、稍もすれば此の歴史を否定滅却せんとするものである。我國に於ても明治維新後の物質科學者の中には、之を否定せんとし輕視するものが多數に現はれたのである。即ち其の多くのものは之を歐米の所謂神話と同一視せんとしたのである。

歐米に於て神話として傳へらるゝものは、物質科學を以て如何とも處理變化せしめ得ざる非物質界の種々なる階級の記録を、斷片的に保存せるものに外ならぬのである。物質科學に於ては、最初視得べく、計測し得べきものを物質と稱へ、宇宙現象は此の物質の作用によつて生ずるものと斷定し、然らずして發生する現象は皆之を否定せんとしたのである。此の物質科學者の意見は、我國に於ても明治維新後、有識者と稱する物質科學者等によつて、大いに採用せられ、我國に存在せし非物質的現象をば悉く否定湮滅せしめんとし、神典古事記の如き確然たる古記録さへ、歐米人の思想に倣うて神話化せんとしたのである。故に精神と云ふことに於ても、我國には魂として其の本體を現はしたる語のあるに拘はらず、其の本體を認めず其の發する現象を種々に批判して精神と稱して居る。而して又精神なる言葉を其の儘採用して教育

に應用して居るのである。然るに近時歐米の科學者も其の精神の發生する現象に就ての觀察は、實に精密であつて、殊に獨逸の學者の如きは、其の現象を大いに研究し、今日進んで其の現象の發生する本體あるに想達し得んとするものゝ如き觀があるのである。即ち獨逸の教育家は近頃國民性又は國民精神と云ふことに大いに氣付いた様である。此れに氣付くときは、自然國民の人種的要素を研究せねばならぬことゝなるのである。獨逸國民は元來ゼルマン民族、ケルト民族、スラブ民族、フィンヌ民族の混合から成つて居つたのである。此等の民族の民族精神なるものは、其の本體が特種の現象を發現するものと考へる様になつた様である。即ちゼルマン民族精神は、活動的で自由を重んじ、個人主義の傾向を有し、ケルト民族精神は、理想的神秘的であり、スラブ、フィンヌ民族精神は服従心の強いことであると云ふことに氣付くに

至つた様である。之れ即ち民族魂の本體の特性であるのである。精神の本體の存在に氣付き初めたのである。之れより恐らくは次第に其の本體の組成分研究に進むと思ふのである。

三、精神本體の組成

精神本體の組成と云ふ問題に就ては、物質科學的方面からは、今日まで更に研究せられざる問題であるのみならず、物質科學者は斯る問題に就ての論説をば寧ろ排斥して居たのである。殊に所謂哲學者并に心理學者等は、精神現象を研究し空想を逞^{たくまし}うして樂しむもの多きが故に、此等の人は唯之れによつて世人を迷はしめたのである。併し稀には此等の空想家の中にも精神本體の一部を臆測するものはあるのである。他日我國の眞の精神文化が發達し、此等の人を迷夢より醒^さめしむるときは遠きにあらざるを信するのである。

我國に於ては精神とは魂をさして云ふのである。今日歐米諸國に於て漸く認め得んとせる國民精神に就ても、我國に於ては既に古き以

前より之を認めて居たのである。精神の存在を認めたる歐米人は其の發生する諸現象の、物質的現象と關係あるものに就ては、種々攻究しつゝあるものもあるが、木體の組成に就ては今日は未だ更に研究せずして居るのである。物質界の研究に熱中せる獨逸國の多くの科學者の如きは、非物質界の存在を全く絶對的に否定せんとするも、物質界の研究が進歩して其の窮極に達するときは、物質の終端の一部は非物質と必ず關係するが故に、物質非物質の境界を認むることなくして、而も其の觀察は非物質界に及んで居るのである。即ち數多の非物質的現象をば物質現象の連續として觀察して居るのである。蓋し斯の如き手段を以てしては絶對的に非物質界の現象を認め得るものではないのである。

斯の如き物質科學的知識を以て教養せられたる獨逸國民は、非物質

界の存在を意識しようとする故に、其の中の非物質體たる靈に關する知識は更に得られぬのである。今日獨逸以外の歐米諸國に於ては、非物質界の存在と靈の活動状態とを研究する學者が多數續出したるに拘らず、獨逸國民は未だ之に就て一顧もせず、物質科學の一途により活動して居るのである。然れども早晚物質及非物質の區別を明かに認識する時期の到來することを吾人は信じて疑はないのである。唯彼等は非物質運動の物質に影響する處の變化を認識するに、卓越なる才能を有するが故に容易に覺醒せぬのである。之れと同一の缺點は我國民にもあるのである。即ち嘗て物質科學に暗く非物質現象にのみ通曉せしを以て、顯著なる物質現象までも非物質現象として觀察する傾向があつたのであるが、一たび物質科學によつて啓發せらるゝや、却つて非物質界の現象に容易に目醒めぬことゝなつたのである。要す

るに物質界及び非物質界の境界は、人智を以ては容易に識別し得られざるものである。吾人の研究によれば、物質界のあらゆるものは終に非物質界即ち靈界に入り得るものであることを信じ得るのである。併し人が物質組成を分解して分子と名づけて居た程度のもものは、決して非物質界に移行することは出来ぬ。尙一層精密に分解して、今日電子と稱して居る位のものにして、始めて靈界に移行し得るものがあるのである。電子となつたものは非物質界に入り得る非物質であつて、最早や物質には屬せざるものである。茲に於て物質よりして非物質を生ずると云はるゝのである。人間には容易に物質と非物質との境を認識し得ないのであるが、靈界から之を觀る時は容易に之を認識し得らるゝとの事である。例へば光線、電氣、磁氣の如き、元來非物質界に屬するものであつて、物質との關係が普く吾人に認められて居るの

である。

精神なるものは靈魂の作用、即ち其の現はす現象に就て、歐米人が名けたる名稱であるのである。我國に於ては古來其の本體を魂と稱し、魂の組成に就ては完全なる説明があるのである。

今魂の組成に就て述べれば、大略次の如くである。

完全なる魂即ち所謂精神と云ふものは、人類特有のものであつて、四魂よりなるべきものである。四個の組成魂が相集りて完全なる精神を形成するものである。其の四個の組成魂も亦各特異の作用を有するものであつて、四魂具足せずとも二魂以上合すれば一精神魂を形成し得るものである。

精神魂を組成する四つの組成魂とは、一、奇魂くしたま—二、荒魂あらかたま—三、和魂にやたま—四、幸魂さいたまを云ふ。

眞の精神修養は此の四魂の具足によつて始めて完成せらるゝものである。

四、人と動物との區別

生物學上では動物と植物の區別に就ても随分議論がある。此の區別は物質科學的に區別することは頗る至難な問題であるが、之を非物質科學的に區別すれば案外容易なる問題である。

進化論學者は其の體組織構成上の關係を研究して、人は動物より進化せるものとし、或は少くとも何等かの關係があるものゝ如きことを唱へて居る。之れは單に物質科學的の觀察である。物質科學的には人と動物とは其の肉體構成上には類似點のあることは事實的に證明せられ居る處であつて異論を挿む餘地はない。肉體の構造上より見れば、下等動物より高等動物、高等動物より人類に確かに移行して居る様に見える。此れは正に人の眼で見得た物質科學的觀察である。

然るに人及び動物の差異に就て非物質的に觀察せんとせしものは、今日まで未だ一人もない様である。人と動物との靈的差異は必ず存在せねばならぬものである。人及び動物の生活及び其他の機能は、決して悉く器械的に行はるゝものでなく、非物質的即ち靈的又所謂精神的にせらるゝものである。故に其の精神的即ち魂的の差異がなくてはならぬのであると思ふ。私は先づ茲に人と動物の魂に就て少しく述ぶることゝしよう。

前に述べたる如く大和魂なる日本人の精神は奇魂、荒魂、和魂、幸魂の四つの組成魂より成つて居るものである。この四魂より精神たる一靈魂がなると云ふことは、人の精神即ち靈魂の組成に就ての非物質的科學の根本義であつて、此の四種の組成魂の種々なる組成關係の異なるに従つて、種々なる人種的の差異及び精神狀態の差異は生ずるもので

ある。現時物質科學者が物質科學の方面より精神を研究し、殊に其の種々なる現象分類を研究せんとせるものは、終に此等の組成魂發見に到達するものであらねばならぬ。併し今此のことは日本以外の國に於ては容易に始まりさうではないのである。

各種の人種に於て物質科學的に其の形態の差異を示して居ることは人の普く知る處である。併し同一黄色人種にして、其の性質の全く異りたるものがある。例へば同じく黄色人種にして日本人と、支那人とは肉體的には殆んど其の形容を同じくして居るも、而も全く其の性質を異にして居る。之れが原因の發見は物質科學的には斷じて不能の問題である。其の性質の差違は物質的でなくして、非物質的であるからである。即ち魂の相違であるのである。

人種中の非物質的差違とは、其の魂形成の差異を云ふのであつて、人

種の中にも二魂よりなるものあり、三魂より成るものもあるのである。元來吾々日本民族の大和魂は四魂具足して成立つて居たものである。四魂が完全に最高に具足するものは眞の四魂具足の神である。神の中でも最高級の神である。世に神と稱せられて居る中には、四魂が完全に具足する眞神靈と、三魂だけ具足する上級の神仙靈と、二魂より成る下級神仙靈及び佛魔靈の如きもの、又一魂より成る妖魅靈の如きものがあるのである。日本民族は元來四魂具足して居つたのであるが、其の各四魂の發達は時代的に幼稚であつたのである。即ち四魂は具足して居つても、其の具足の程度は頗る小であつた。同時に物質科學の發達も亦實に微々たるものであつたのである。之れに反して他の四魂不具足の國に於ては、一魂乃至二魂は偉大なる發達を爲して居たものがあつたのである。最初小さく四魂具足して居つた大和民

族は、此等の國民の偉大に發達した一魂或は二魂の組成より生せる物質科學の發達を見て之れに心酔し、之を模倣することにより自から具足して居た四魂中彼と同一の魂をば、同一程度に發達せしむべく努力したのである。即ち最初儒佛によつて燦爛たる文化の輸入せられし際、之を模倣すべく努力した爲め、我國民の四魂具足は不具足となり、其の不具足の魂の形態は全く之れと同一程度となるに至つたのである。唯其の異なる處は、魂の素質に於て四魂具足せる小形態を有することであつて、其の外形は如何に外來思想に一致したる四魂不具足の形態に變化するも、其の根本に於て四魂具足の大和魂があるのである。併しながら此の四魂は異常に發達したる二魂の爲めに壓迫せられ、恰も純二魂民族と同様の觀を呈するに至つたのである。

然りと雖も四魂具足の素質を有するものと、有せざるものとは、其の

物質科學的の知識の愈々發達する内に差異を生ずるものであつて、之れが觀察は非物質科學的觀察によつてのみ明かになし得るものである。

物質的科學に於ても、其の發達の頂點まで進歩するときは、終に物質界の彼方に非物質界の存在することに氣付くに至るものである。然れども物質科學の知識を以ては、兩界の境界にまでは入ることを得るが、深く非物質界の深部まで觀察することは到底不可能事とせねばならぬ。

今日世界の文化學上、日本と云ふ國には少しも認むべきものはないとは、今猶歐米の種々なる方面の學者の云ふ處である。我が日本の學者の中にも亦之れに共鳴するものゝあることを見るのである。日本には世界に誇るべき文化はないと云ふのは、物質界ありて非物質界あ

るを知らざるもの、云ふ言葉であつて、一たび非物質界の存在に目醒めるときは、我國の非物質文化の發達に驚かざる能はぬものがあるのである。

今や世界各國の人々も、東亞の一孤島たる日本が豫期以上の發展を爲すを見て、其の原因を少しづつ、研究し非物質界即ち靈界の存在に少しは目醒めんとしつゝあるのである。物質科學に就ては、我國は嘗て歐米先進國に學ぶ所多かつたのであるが、併し非物質科學の研究に就ては今更又歐米模倣に走ることは廢めねばならぬ。彼等が先進國として物質科學を以て吾人を指導せしが如く、非物質的科學を以て我國が彼等を導かねばならぬのである。然るに物質科學に於て歐米模倣を爲せしが如くに、今將に僅かに醒めんとせる彼の歐米諸國の幼稚なる非物質科學的試驗及び理論を同じく模倣せんとするが如きは、自ら

悔^{あなご}るの甚しきものと云はねばならぬ。

故に私は今此の人と動物との區別を我國特有の非物質科學即ち靈的知識の見地から検討して見ようと思ふ。夫れには先づ人の靈的組成に就て少しく述べねばならぬのである。

人も肉體を有つて居る生物なるが故に、體靈と稱する肉體の發達に關する靈を有するのである。此の體靈は男子の精蟲及び女子の卵細胞^{らんさいぼう}内にあるものであつて、此の兩者が孵化^{ふくわ}合一した時始めて異常に發達する性質を有するものである。

此の卵と精蟲が孵化して體靈が發達し、其の勢力の旺盛^{わうせい}となる状態は、之れを容易に實驗することが出来る。併し人の卵と精蟲とを以ての試験は未だ出來ぬことである。私は蛙に就て自分自身獨逸のハル^レ大學に於て實驗したことがある。今其の試験の有様を略記して見

よう。

ルーベを装置したる硝子板の上に一個の蛙の卵をとり、之れに蛙の精蟲を作用せしめ、其の精蟲の一匹が卵の中に頭を突入したるとき、なるべく他のものを掃除して、其の孵化したる卵をばルーベによりよく観察し得る様にして見て居ると、其の卵が分裂を初むる共に回轉し、種々細分裂を現はして發達し、蛙に於ては精蟲の突入したる部分は成長しては尾部となるのである。人の卵及び精蟲も其の體靈の作用により斯くの如く發達して胎兒となるのである。此の體靈の作用の點は動物も人も其の初期に於ては同一である。唯其の母體內に於て成育し、分娩して一個の生體となるの時間は、動物と人とは大いに異り、人類に於ては最も長く通常十ヶ月を要するのである。

人類に於ても動物に於ても、體靈は其の肉體の成熟期に至るまでは

盛んに作用するのであつて、人類に於ては男子は通常二十五歳までが體靈の發育作用の行はれる時期である。女子は此れより早く止むのである。然るに動物に於ては此の期間が非常に短きを常とする。體靈の機能に就ては人と動物との差異はない。是れ體の肉體的組織が相類似して居るからであると思ふのである。

人と動物との靈的差異の最も甚だしきは、意識靈に於てである。

人の意識靈なるものは胎兒が成育して、母體より分娩されて第一回の呼吸を爲すの際、因縁ある靈界の頭領によつて入れられるものであつて、體靈を第一靈として之れを第二靈と云ふのである。人の第二靈として入れられるものは必ず本來の人靈であるのである。通常完全に淨化したる人靈が入れられるのである。而して此の第二靈たる人靈に感應して種々なる種類の第三靈が憑依するのである。此の第二

靈及び第三靈を總稱して意識靈と云ふのである。

動物に於ても動物の靈魂は其の分娩時に入れらるゝものである。之れを入るゝものは動物靈界の種々なる靈の頭領と云ふべきものである。人の靈も亦妖魅界まじまじに入りて動物靈と同一に變化するときは、動物の靈として入れられるものである。無論此の場合には人靈ではなく、既に動物靈となるが故に動物の體に入れらるゝのである。人靈ならば動物の體に入れられる譯はない。動物靈は人靈と異りて唯一種の奇魂くたまである。此の動物の奇魂たる動物靈には人の如く第三靈が感合するのである。其の第三靈も亦奇魂たる種々なる動物靈である。此の第三靈たる奇魂は其の動物の第二靈とは異なる種々なる種類の奇魂であると云ふのである。

空氣の世界に於て人と同じく生活して居る動物が、死して靈界に入

るときに於ては、其の第三靈と離れて第二靈のみとなつて入るのである。

生きた動物が人に感應するときは、第三靈のついたまゝ人に憑くことがあるものである。

之れによつて見れば、人と動物との差異は其の靈の差異であるのである。人には二魂以上の人靈は第二靈として最初體內に入り、之れに尙他の種々なる靈は第三靈として憑依ひょういし意識靈を形成すれども、動物には其の第二靈も第三靈も奇魂であつて、人の如き意識靈を構成することはないのである。

人と動物とは肉體的には稍類似したる點があるが、靈的には全く相異なるものである。以上述べしことによつて大體人と動物との靈的區別を明かになし得たことと思ふのである。

五、非物質科學の研究

三八

非物質科學の研究とは、即ち靈的研究のことである。之が研究に就ては二種類の研究方法があるのである。即ち一は非物質界即ち靈界の研究であり、二は其の非物質の世界にある種々なる靈體の研究である。

我國に於ては靈妙なる作用を有するもの即ち靈の研究と云ふことは、既に過去に於て大いになされて居たのであるが、非物質界即ち靈界に就ての詳細なる研究は殆んどなされて居らなかつたのである。

何故に非物質界即ち靈界を研究せざれば、非物質科學が進歩せぬかと云ふに、今日までの所謂心靈研究者等は靈界の真相を研究することを知らず、唯人に憑依する靈のみを研究して靈界とは斯る靈體のみ

存在する世界なるが如く思惟し、其の靈界が幾つもの分野があり、而も其の各分野に相異なる靈體の存在することに氣付かなかつたのである。即ち靈のみを研究して其の靈の所屬する靈界を研究しなかつたが故に、靈界即ち非物質界の研究は更に進歩しなかつたのである。

故に今日まで我國に於て靈研究に従事せるものは、此の種々なる靈が種々異りたる現象を呈することに興味を引かれ、之を以て靈界をば廣き一の奇妙なる世界なりと心得て居るもののみであつた。殊に物質界より非物質界を窺はんとするものは、何人も先づ其の物質界に接觸して存在する靈界に於ける、靈の實驗を爲すを常とする。而して其の場合其の種々なる靈に接することによつて、種々な靈が靈界に確かに存在すると信ずるのみで、更に特別に種々なる非物質界即ち靈界の存在の研究に意を注がないのである。

三九

我が國民は古來より靈研究に經驗を有し、靈に就ては種々なる種類のあることを知りて、中には頗る劣等のものあり、或は頗る上等のものあることは、屢々實驗して知り盡して居るのである。併し此等の種々なる種類の靈は、上に述べたるが如く皆一靈界に占居して居るものと斷定して居り、其の靈の種類に應じ種々なる階級の靈界があると云ふことを考ふるものはなかつたのである。

此の點に考へ及ばなかつたのは、眞の神靈が靈界の何處かに存在ましますと云ふ確信がなかつたからである。即ち「日本は神國なり」と口にはしながらも、神靈の實在を確信するの觀念に缺けて居たのである。此の觀念の缺如は佛教の輸入によつて甚だしくなつたのである。即ち祖靈にあらざる、靈妙の偉力ある靈體信奉の信仰の普及せしが故に、人は其の靈妙さに驚異し、之に満足して四魂具足の神靈を求むるの

觀念を忘却し、又之れが爲めに廣く靈界を研究せんとの希望を滅却し去らるゝに至つたのである。

我が國民の中には明治維新後に歐米の物質文明を模倣したるが如く、今日尙歐米に於ける靈研究を模倣するものがある。歐米に於ける靈研究は、物質界より窺ふ靈研究であつて、物質界に近く出沒するところの極めて種々なる靈を窺ひ知り得るのみであつて、眞の神靈の存在などは未だ想像だも及ばぬのである。従つて靈界に就ての研究は殆んど閑却されて居るのである。西洋の淺薄なる靈研究を我國に於て模倣し、心靈學などの言葉を以て靈界のことを論ふ者あるが故に、却つて我國の靈界の研究は遅々として進歩せぬのである。

私は靈研究に従事し、我國に於て一般に靈と稱せられて居るものを詳細に實驗し、其の性行を研究したる結果、人の一般に靈と稱するもの

は、我々大和民族の信仰すべき眞の神靈にあらざることを確めてより、眞の神靈の研究を進むると同時に、此等の種々なる靈體の存在する靈界の調査研究を爲すことに努めたのである。而して斯く靈界の研究を爲すことによつて、或る種の靈界に於て眞の神靈を認めたとのである。今其の研究に就て述べれば次の如くである。

抑も宇宙には非物質界先づ存し、其の中に物質が生じたのである。故に靈界には物質界と最も接近した靈界あり、又大いに隔絶せる靈界等種々なる區別があるのである。即ち物質界に最も接近せる幽界と稱する靈界には、他の靈界の靈體は容易に出入し、物質界のものと交通し得るものなれども、之れと反對に物質界と大いに隔絶したる靈界よりは、物質界と容易に交通なし得ざるを常とするのである。又其の靈界を異にするに従つて、之に屬す靈體も全く其の性質を異にするもの

である。而して其の物質界即ち空氣の世界と最も接近せる幽界に次ぐものを妖魅界と云ふのである。妖魅界とは主に動物靈の占有せる靈界である。我國に於ては妖魅界に次ぐ靈界をば之れを佛魔界と云ひ、之れに次ぐ靈界をば神仙界と云ひ、最深部に位する靈界をば神靈界と云ふのである。

各靈界は夫々其の中に各異りたる靈體を有し、又各靈界は互に殆んど直接の靈的交通は杜絶して、互に相見ることにも出来ぬを通例とする。唯幽界に於てか或は直接隣接せる兩界に於てのみは、特別の場合には下級の靈が上級靈と相會し得ることがあるのである。而して上級靈界の神は意の儘に下級の靈界に自由に入り得て、下級の靈を見ることを能ふのである。上級靈界の靈にして靈界位置の間隔大なるものに於ては、下級靈は其の上級靈と全く交渉し得ざるものである。

前記五靈界の中、人類と最も密接なる關係ある靈界を幽界と云ふのである。幽界は物質界に最も接近せる靈界である。死後の人靈は必ず先づ幽界に入り、約十日間此處に滞在し、然る後、人々生前の信仰及び靈的關係によつて、通常或は佛魔界に、或は神仙界に移り行くものである。

1. 幽 界

幽界とは靈界中で空氣の世界である現世と、最も隣接したる靈界であつて、其の確かに存在することは太古より人の知れる處であつたようである。靈體の存在を確認せるものは、其の現存する處は此の幽界であると信じて居たのである。

佛教にては人死して次生の生緣未だ熟せざるの故に、到るべき處に到らざる間の體を中有といひ、中有とは生有、本有、死有の三者に對す

るもので、これを加へて四有といふと云ふのである。この四有の循環往復が即ち生死輪迴であつて、極善、極惡のものは中有なしに直に次生に移るものとせられてあることを見るのである。

幽界ありて他に種々なる靈界あるを知らざるものが、生死の間を簡單に結合せんとして説明せんとするものゝ設けたる假説としては、適當の説であると思ふ。併し幽界以外に尙ほ種々なる靈界がありて、人は皆其の因縁によつて其の往く處を異にし、或る種の人は幽界以外に少しも他の靈界に出でずして終るものがあり、又或る人は一定時日幽界に滞在して後、他の靈界に移るものもある。何れの靈界に入るものも必ず一度は幽界を通過するものである。又何れの靈も其の靈界より空氣の世界に於けるものと交通せんと欲するものは、必ず先づ幽界に出でてせねばならぬものである。

幽界は斯くの如く總ての靈が皆其の靈界に出入するには、一度は必ず通過せざる可らざる處であり、又時としては滞在せねばならぬ處であるから、幽界には總ある靈體の存在を認めるのである。加之幽界を自己の所屬の靈界として、永久幽界に接息せねばならぬ靈もあるのである。

靈界への入出は皆悉く幽界よりせらるゝが故に、幽界を以て唯一の靈界と認めたるものがあつた爲めに、前に述べたるが如く、之れを稱して中有界と云ふに至りたるものと思ふのである、之れには人と交通する靈は、悉く此處よりすることも、一つの原因であつたと思ふ。

2. 妖 魅 靈 界

妖魅靈界とて幽界に次で人類世界と最も接近せる最下級靈界は、一名動物靈界とも云ふべきものである。元來動物の所屬すべき靈界で

あるのである。人類の靈にして此の靈界に入るものゝあるは一の變態であつて、人類は元來此れより以上の靈界に入るべきであるのである。然るに之れに入り得ざる運命にある下等の人類の靈は動物靈と伍して妖魅界に入るのである。奇魂くしたまの發達せざる動物靈のみ存在する國家例へば歐米の或る國々の國家に於ける妖魅界は人靈のみが活動するのである。それは動物靈が活動せざるが爲めである。其の理由に就ては後に詳論するであらう。然るに之れに反して我が日本國の妖魅界に於ては、動物靈が盛んに活動して居るのである。茲に先づ我國の妖魅界に於ける動物靈に就て詳細に述べれば、

動物は植物の如く體靈のみではない。物質科學上では靈の區別が出来ぬ故に、動物植物の區別の爲めに種々議論されて居るが、之れには靈的に區別することが、眞の科學的の區別法であると思ふ。何となれ

ば動物も植物も皆物質的及び非物質的に生活して居るものであるからである。

動物も亦人の如く、體靈の外に固有の動物靈を有して居るものである。其の靈の性質は人の意識靈中の奇魂くしたまとは異なるものであるが、同じく奇魂の一種である。而して前にも述べたる如く人の第二靈に當る此の特種の奇魂と、同じく人の第三靈に相當する處の靈は皆感應し得るものである。而して其の靈は同じく奇魂の動物靈である。此の第三靈は人に於けると同じく其の動物の死せる時、自ら分離するものである。肉體を有つた動物の靈が人に憑依ひょういするときは、其の動物は通常第三靈の憑ついた儘憑依するのである。又死後の動物靈即ち肉體と分離したる後の動物靈も亦人に憑依し得るものである。

要するに妖魅界は一魂の動物靈の入るべき靈界である。人の靈も

亦動物と同様に墮落して一魂となるときは、同じく妖魅界に入りて活動するものである。元來人にして生來一魂の人はないものである。併し靈魂なるものは下等なる信仰によつて墮落、消滅し行くものである。元來四魂具足の大和民族でも信仰を誤ることによつて遺傳的に墮落の一途を辿たどる内には、終に四魂の素質を有しながら信仰の迷によつて魂の働きは無能となり、妖魅界に陥おちるに至ることがあるのである。此の靈的無能状態となり、一魂の動物と同様になつたものは、我々は之れを再三實驗することを得たのである。即ち靈の實驗に際して、誤りたる信仰の下に死せる祖靈達をば、最初妖魅界より探し出さんとする場合には、皆昏睡こんすい状態となつて更に意識なく、或る種の神懸かみかり法によつて其等の靈を妖魅界以外に持ち來して次第に意識を恢復くわいふくせしめんとしても自己の死をさへ覺知せざるもの多く、自己の病中の状態をのみ

記憶し、死後無意識状態に陥りたるまゝ、時の経過したることを更に意識せざるものが多いのである。勿論死後の佛事供養を子孫が丁重に行ひたることなど、少しも記憶しなかつたのである。之れによつて我が日本人にして外來宗教を信仰して死したるものは、多くは皆妖魅界に入りて、昏睡状態に陥り、多くの歳月を経過するときは、更に魂の分解によつて漸次墮落、消滅に至るものである。故に四魂具足の貴重なる素質を有する吾々大和民族は今に於て是非共信仰上大いに覺醒せねばならぬのである。若し現世に於て道を誤りて動物性となり、死後動物の如く執念なる奇魂の働きのみとなれる人靈は、惡亡靈として現世に彷徨ひ出づるが如きことゝもなるのである。妖魅界より現はるゝ人靈は、全く動物と同じく完全の意識はなく、唯奇魂的諸現象を現はすのみのものである。

動物靈の活躍せざる歐洲の或る國々の妖魅界、換言すれば物質界と最も相接近し容易に人と交通し得る靈界に於ては、人と交通するの靈體は人靈あるのみである。此等の國の人は多くは皆二魂民族なるが故に、其の善良なるものは、吾が國の神仙界に一致する靈界に入るものもあるも、多くは妖魅界に入るのである。妖魅界のものは人に最も容易に接近し得るが故に、我國人にして若し右に云へる國人の説く耶蘇教を信じ、或は彼等の經營せる宗教的の學校に入るときは、能く彼等と同種の人靈が憑依せることを靈寫真に於て實驗するのである。人靈が妖魅界に於て活動するが故に、通常行はるゝ靈的試験に於ては、動物靈によるものより判然たる實驗をなし得るのである。斯く靈試験に發動し來る靈體は常に人靈なるが故に、其の作業はよく人の生活法と一致するのである。人或は我國に於ての靈學は幼稚にして、此等の國の

靈學が發達せるが如く信するものあれども、實は決して然るにあらず、其の對象とする靈の人靈なるが爲めに左様に觀察せらるゝのである。

3 佛 魔 界

我國に於ては初め妖魅界に次で、物質界殊に人類に接近して居た靈界は神仙界であつたのである。然るに欽明天皇のとき佛教傳來し、多數の有徳の僧侶は我國に渡り來りて、自己の有する信仰による靈力を以て、我國妖魅界の動物靈を壓服、使役した。而して此等の僧侶が死して靈界に入りては、生前より妖魅界を征服して居つた故に、死後妖魅界には入らず、而も我國の神仙界に入ることとは許されぬから、妖魅界以上の靈界にして、或る意味に於ては神仙界と同一たる一靈界を形成するに至つた。佛教が隆盛となり、日本人にして之を信仰して外來僧侶の優秀なるものと同一程度の信仰に進み或は祖國愛を加へて、それ以上

に進みたるものは、皆此の靈界に入ることゝなつたのである。之れを佛魔界と名づくるのである。

然らば佛教を信仰するものは死後皆佛魔界に入り得るやと云ふに決して然らずである。妖魅靈を服従せしむべき靈力を得たるものゝみが佛魔界に入り得るものである。佛教を信仰しても夫れだけに眞に信仰せざるものは、死後佛魔界に入ることを得ず、皆動物靈の居る妖魅界に入りて、死の觀念もなく昏睡状態を續けるのである。

日本の佛教中、淨土眞宗の如く靈との關係を斷絶し、敬神崇祖を全く離れたる信仰に入るものは、死後の靈は佛魔界に入らず、僧侶、信者悉く眞宗の所謂善人も惡人も皆妖魅界に墮落し、昏睡状態となり、靈力無能者となりて、如何なる方法を以てするも覺醒することを得ざるものとなるのである。故に彼等は死後覺醒するものなく靈界より何の報告

を齎すものもないのである。斯る最下等の靈界をば、西方極樂淨土、十萬億土と空想して、人を欺いて居るのである。靈の實在を認めず、崇祖の信仰なき宗教信者は、死後皆眞宗信徒と同一の經過を辿るものである。

通常佛魔界に入りたる佛徒も、其の僧侶たりしと信徒たりしとを問はず、大和民族としての民族愛は極めて缺乏するが、祖國愛と云ふべきものは相當有して居るものである。此の點は神仙界と相通じて居るものであつて、我が國民の多數が佛教信者となつても、我が國家有事の時に於て佛教徒にも報國的行爲あるものゝ出づることあるのは、佛魔界にあつて之等佛教徒を靈的に支配する佛魔に祖國愛の存在せることによつて起るのである。又佛魔の鎮れる社寺の園内に在る動物が戰時などに靈的行動を爲すものあるも之れが爲めである。

4 神 仙 界

妖魅界以上の靈界にして、佛魔界より稍上等の靈界を神仙界又は天狗界と云ふ。神仙界又天狗界は我國に於ては妖魅界に次で物質界と接近せる靈界であつたのである。而して天狗は動物靈と同じく親しく人類と交はり、之に憑依し得て居たものである。而して神仙界の神は其の靈力を顯はすには、此の天狗を使用して居たのである。神仙界の神力は種々なる天狗によつて現はされて居たのである。又佛魔が日本に渡來した當時には、神仙靈の天狗を使用するが如く、動物靈を使用して居たのである。

神仙界に於て専ら神仙靈によつて天狗が使役せられて居たときは、動物靈以上なる天狗靈の直接の靈的作用が人類の上に作用し得て居たものである。然るに此の天狗の靈的作用は佛魔によつて惡化せ

られたのである。神仙靈が獨り天狗を使用して居た時代には、外來の佛魔は我國に於て左程勢力を得ることは出来なかつたのである。然るに日本人にして有力なる動物靈を使用して偉大なる靈力を有したる僧、就中傳教、弘法の如きもの相次で出づるに及び、此等の佛魔は仙界の一部と妥協するに至り、天狗にして佛魔によつて使役せらるゝものがあるに至つたのである。此の妥協は神仙靈の一部により行はれたものであつて、佛教徒の設けたる所謂神佛習合の兩部神道と名付けられたる神道によつて實行せられたのであるが、他の神仙靈は絶対に妥協に應じなかつたのである。

吾々は神佛習合による兩部神道によつて、神仙靈の一部と佛教との妥協したることは、我國神道の損害であつたことは既に明かに認め得たる處であつた。併し佛魔の立場よりすれば、此の神仙靈の一部と妥

協をなし得たことは、我國の佛教が其の本國である支那、印度を超越して發達し得た原因であると思ふのである。

佛魔と神仙靈の妥協によつて行はれた佛教隆盛時の作業は、大なる罪惡であると云はねばならぬ。明治維新に於ける神佛分離の大業に於ては、佛魔が神仙靈を利用したるものは、之によつて容易に分離せられたのであるが、神仙靈にして好んで佛魔と妥協し佛魔の名に隠れて働いたものは、今日猶分離せずして其儘存續して居るのである。而して神仙靈中佛魔と妥協せざりしものは、佛徒によつて皆其の神名の變せられて居ることを見るのである。

神仙靈にして全く佛名を以て奉祀せられ、佛教と全く妥協して居たもの、例へば金毘羅の如きものにしても、金毘羅と稱せられたるものは我國の神仙靈としては大物主神と名けられて居たものである。大物

主神は佛教にある梵語「クンビーラ」と變名せられて佛魔と妥協し、大に其の靈力を發揮したのである。現に猶ほ佛にもあらず、神にもあらずる大威力のあるものとして大に信仰せられて居る。又不動尊の如き其の本體は我國の神仙靈である羽山戸神を、不動明王又不動尊と稱するのである。古事記によれば羽山戸神と云ふのは大年神第十五番目の御子神であつて、大年神が天知迦流美豆毘賣に娶ひまして生みませる御子神である。

大年神と申す神は大國主神よりも遙かに古くして、大年神は須佐之男神が大山津見神の女名は神大市毘賣に娶ひて生みませる御子であつて、此の毘賣には尙次に宇迦之御魂神と申す御子神があつた。大年神は須佐之男神の第二番目の御子であるが、正系としては第三世に當られたのである。併し其の子孫は全く別系となつたのである。これ

が爲め大年神の多數の御子等の中には後に思想の少しは變つた神も出來たのであると思ふのである。

佛教徒は一時其の勢力を利用して我國の神仙界の神をば全く佛名化せんとしたのである。然れども彼等と妥協せざる神に對しては、其の御神名を故意に少しく變化して公にするを常として居た様である。例へば天照大御神をば天照大神と稱し奉り、又國之常立神を國常立尊と云ふが如くであつて、此等の變名に對しては皆神と稱する一種の邪靈が附屬せしめられて居たのである。

5 神 靈 界

神靈界と云へば、我が日本に於ける最上位の眞の神靈等が鎮り居給ふ靈界である。此の靈界の存在することは明道會の研究によつて始めて闡明せられたものであつて、從來の文献中には神靈界と稱する靈

界の名稱はなかつたのである。

併し神靈界は無論以前より靈界には實在して居たのである。元來我國の靈界には幽界は別として妖魅、神仙、神靈の三種の靈界があつたのである。大八島國の靈界は此の三種の靈界に分類せられてあつたのである。後に佛教が渡來してより佛魔界を形成し四種の靈界となるまでは、此の三種の靈界は儼然として各固有の靈をもつて居たのである。即ち神靈界の神等は最上位に位し、神仙界の神々と交通せられ、神仙靈は眞神靈に師事して居られたのである。而して又神仙靈は妖魅靈と交通し、之を使役して居られたのである。如何なる動物靈も天狗靈の下位にあつて皆天狗靈の爲め使役せられて居たのである。

佛教渡來後佛魔界の成るに及んで、妖魅界の動物靈は佛魔の支配する所となり、又動物靈は天狗靈に倣^{なま}うて活動するに至り、次で神仙靈に

して佛魔と共鳴するものあるに至るや、終に神靈界は閉鎖^{ひん}せらるゝに至つたのである。閉鎖された後は神仙界の或る神等は、寧ろ眞神靈の再び現はれ給ふことを希はざるの態度に出でたものゝ様であることを見るのである。

神靈界の閉鎖された後は、佛魔は神仙靈の威力を觀破して、愈々横暴、自由なる活動をなすに至り、我國をば全く佛化するに至つたのである。

六、精神文化と靈研究

精神文化と云ふ問題が世人の注意する處となるや、我國に於ても精神文化の根底なる靈の研究の爲めに、大いに努力する人が生じたのである。又人は靈現象を以て精神文化作用の心髓しんすうなりとし、人生をば悉く精神文化を以て説明し得ると考ふるものもあるに至つたのである。靈の研究をば物質科學的の知識のみを以てせんとするものは、靈の本體の研究に於て誤を有するものであるが、又物質科學的の知識の缺乏せるものも靈現象の觀察を誤るものである。現時の我國の靈研究者は多くは其の何れにか偏へんしたるものであると思ふ。

1. 物質科學的の靈研究

我國に於ける物質科學の知識の所有者と云へば、其の種類は實に多

數である。中には歐米の優秀物質科學者に伍して劣らざるまでに或る科學の蘊うん奥おくを極め、歐米の科學者の如く物質科學の範圍はんみを脱せる作用、即ち非物質たる靈が物質に與ふる影響及び現象を單なる物質現象として研究し、或は物質の構成を非物質科學の如きものを基礎として説明せんとするものもあるのである。此の種の學者は物質界を越えて非物質界の境界部に入るも、尙それより深くは非物質界に入ることを得ず、物質界の終端點より非物質界の始端點を窺うかがうて、而もそれより深部に純非物質界なるものがあるとは思はぬのである。而して今その不明の非物質現象は早晚物質界より明かに窺知出来る様になるものと、固く信じて居る様であるのである。此等の學者のなして居る非物質の物質に及ばず影響に就ての研究は、實に恐るべきものがあるのである。併し物質科學の蘊奥に達し、一部に於ては物質科學の立場よ

り、それとは氣付かずして而も實際に非物質的現象を研究して居る學者等は、研究は爲しつゝも皆一種の不安を感じて居る様であるのである。例へば獨逸國の物理學大家であつて伯林のフリードリヒ・ウイヘルム大學の總長であつた、マックスプランク氏の如き、科學の權威者として、吾々が大いに尊敬して居た人である。氏はケーニヒベルグ大學より發展せられた學者であるだけ、詩人ゲーテの大崇拜者の一人である。氏の如き現代物理學の蘊奥に達して居らるゝ學者が量子論を述ぶるに當り、ゲーテの言葉を想起して「努力する限り人は迷ふ」と云うて居る。今日物理學者は誰れでも物質科學の蘊奥に達するとき、大いに迷ひに入るの感を深くするものがあるやうである。之れは量子其のものは既に非物質界に潛入せるが故である。

物質界を超越して其の研究の一部が非物質界に入るときは其の試

験は必ず真空内に於て行はるのである。其の試験は「エネルギー」と稱せらるゝ或るものゝ力を試験するのである。即ち「エネルギー」の物質に對して起す反應を試験するのであつて、其の「エネルギー」は所謂波動として現はるのである。而して其の波動は如何にして消失するかと云ふことが疑問であるのである。此の「エネルギー」は既に物質ではなくして靈力であるのである。然るに科學者の多くは物質界よりして非物質の力の及ぼす現象を試験し居りながら、非物質の儼然として存在して居ることに氣付かないのである。

我が日本に於ても此の種の學者は尠くはない。併し此の種の學者が非物質の存在に目醒むるは時の問題であると思ふ。何となれば實際に於て彼等は物質界を超越したる非物質の試験をして居るのであるから、それが非物質たるころの靈界の靈的現象であると氣付けば

直に靈界現象の一部を了解し得るからである。

上述の如き我國一部の物質科學者中には、非物質科學をば殊更に排斥するが如きの態度を示すものがある。中には又物質科學の蘊奥を研究するものにして非物質界の研究を爲さんとして、何等かの信仰をなすものも尠くないのである。又我國の陸海軍人の如きは、非物質の存在の理論的研究と云ふことに重きを置かずして、何等かの信仰を勵まむとするものがあるのであるが、之れ亦要するに非物質科學の研究に外ならぬのである。

之れに反して現時の我國の物質科學者にして盛んに、非物質の存在に反對して、之れを否定せんとするものもあるも、こは淺薄なる物質科學者であり、物質科學の初步の大綱のみを理解して、更に其の蘊奥細微の點を理解せざるものである。例へば小、中學程度の教師階級の人に此

の種の人が多いためである。此等の人々は兒童、青年教育者として、何れも物質科學の初步を理解すれども、其の蘊奥を究むるものは尠ないのである。即ち此等の人々は物質科學の幹根のみを學んで居る人である。幹根の知識あれども其の枝葉に就ては其の知識乏しきが故に、非物質界の現存することは更に知らぬのである。恰も枝葉なき樹木は空氣の世界を知る要がないと同様である。更に知らぬが故に其の存在を認めようとせず、絶對に之れに反對するのである。故に此の種の人々は靈研究と云ふことに手を觸れようとせぬものが多いのである。

稀には此の種の人で靈研究を爲す人があることもあるが、其等の人々は自己の幼稚なる物質科學の知識を以て、靈現象を觀察せんとするのであるから、著名なる下等の靈現象及び靈作用を認めて満足せんとす

るのである。斯様の人の認むる靈作用の如く、著明に物質反應を現はす靈は下級の靈である。人が下級の靈に迷ひたるときは、決して靈界の狀況など分るものではないのである。

歐米の靈研究者も亦然りて、彼等の多くは靈力の物質化現象などを、最も著明の靈現象として喜んで居るのである。我國に於ても之れに倣うて研究するものゝ如きは、種々なる下級靈の奇現象を集むることを靈研究の目的として居る。此れは歐米人の如く物質あるを知つて非物質の存在を信せざりし人々に對し、非物質の存在に目醒めしめんが爲めには必要なるも、眞の大和民族に立ち歸り敬神崇祖の信仰をなすべき使命ある日本人には其の必要はないのである。元來我が國民は皆萬世一系の天皇に忠誠の心を有つて居る筈である。忠誠の心あるものは又靈の存在、神の實在を信するが普通である。此の觀念を有

せざるものは歐米物質科學に迷はされたる非日本人であるのである。故に我國の兒童教育に従事する所謂教師たるものゝ資格の一大要件は、神靈を認め忠君愛國の思想を有することとでなければならぬ。故に學校教師の養成に當つては、先づ此の資格條件を具備せしめ、業卒へて之を世に送るに際しては此の點に嚴密なる驗定を必要とせねばならぬ。

靈と神との實在を認め、眞の忠義の觀念の把持者たらんが爲めには、先づ神靈學の研究を、恰も物質科學の研究の如く爲さねばならぬ。併し此の研究は世の所謂靈研究者の如く、下級靈の靈的活動をのみ研究して居つては、決して其の目的を達し得るものではないのである。

憑依現象の如き普通の靈的現象は一般に人の研究するものであり、又靈の物質運動現象の如きは靈研究を爲すものゝよく行ふ處の研究

法である。併し斯くの如き靈現象を人に現はし見せしむる靈は、或る下級の靈であつて、此の種の靈の種類は、實に千種萬様であり、時と共に新らしき珍奇なる仕業を示すものである。之れが研究を新たにすることによつて、靈界を研究し盡すことは出来ぬものである。唯靈界の或る靈の種類を見得るのみである。

併し此の靈界の最下級の靈にして、物質世界に最接近し、物質に靈的現象を容易に起さしめ得るものが、物質科學者に靈の實在を理解せしむる初歩の靈研究材料であるのである。

2. 非物質科學的研究

現時の世界に於て我國の如く、非物質科學の發達せる國家は他にはないと云はねばならぬと思ふ。現時尙物質科學を絶對とせるものと、然らざるものとは歐米の諸國に於ても存在せることを見るのである。

獨逸國民の如きも、今日は少しは變化しつゝあるかとも見えぬでもないが、一時は絶對に物質科學的思想を有する國民であつたのであつて、今も猶其の餘流であるらしいのである。又佛國の如く、物質科學を發達せしむると共に、非物質科學の一種とも見做すべき哲學をば、決して放擲せざりし國もあるのである。此等諸國の兒童教育法の變遷の狀態を観察すれば、其處に大なる差異の存在することを見るのである。而して此等の諸國は過去に於ての非物質文化の眞味を體驗せぬのである。故に物質科學專攻によつて今日の如き困難をして居つても、容易に非物質科學發達の必要に目醒めぬのである。

之れに反して我が日本の如きは、儒佛の輸入せられざる前は、可成非物質科學の發達せる國であつたが、儒佛の傳播發達によつて一種異りたる非物質的科學、即ち一種の信仰を以て精神修養をなすこととなつ

たのである。無論今日の物質科學を以ての如き、科學的組織を以ては居らずとも、印度及び支那より種々精神的に説明せられたものがあつたのである。私は之を精神的には科學と云はず修養と云ふことにする。

非物質的即ち精神的修養を以て第一義として教育せられて居た日本國民の如きは、歐米諸國の如く物質科學を主に研究して、其の終局に達し始めて、進んで非物質的即ち精神的靈的研究を爲さんとするものとは大なる差違を生ずるものである。今其の差違の生ずる點に就て、少しく詳述すれば、日本國民の如く非物質的即ち精神的修養を受け居たるものは、自己の民族的の關係を明かにして居ることを特異とするのである。

精神的修養の重要點は民族性を尊重することである。民族性を尊

重するものは、其の特性として必ず崇祖の念を有つて居る。此の崇祖の觀念は生物的本能であり、崇祖の觀念を有するものは生きてる親に對して孝心を有すると同様に、死したる親に對し祖靈としての靈の存在を認めて奉仕するのである。而して死したる親の靈は何處に現存するかを考慮するとき、靈界即ち非物質界の存在を確信するに至るのである。支那に於ける儒教の如く生きてる親に對する孝に就ては、講究し盡して居りても、死したる親に對する孝、即ち崇祖の觀念のない教を信する國に於ては民族的觀念は更に生ぜざるものである。

現時非物質科學として、恰も物質科學の如く、系統的によく發達したる科學を有する國は何處にも存在せざれども、民族的魂の發達し、また之に伴ひ所謂かむなごら惟神の道に就ての學を有すること我國の如きものは、之を非物質科學を有するものと云ふべきである。

斯の種の非物質科學の發達せる國の國民は、必ず民族と直接關係ある神と稱するものを認めて居るのである。而して神の存在することを知りて、而も其の實在を認識し得ざるに至りしものあるは、物質界あるを知りて、非物質界あるを知らざりしが爲めである。此等の人が若し靈の研究を爲すときは全く其の方法を誤るのである。即ち靈の存在を研究するも神靈の研究はせぬのである。之れに反して非物質界の存在を信じて靈の研究を爲すものは神靈の實在を研究せねば止まぬのである。又神靈の實在を認識するときは、同時に其の神靈の現存しします神靈界の研究をもするのである。従つて民族の祖神なる觀念を有せざるものとは、其の研究法は全く異なるのである。斯くの如き靈研究により民族の祖神を明かにすることによつて、眞の敬神崇祖の意義を理解し得るのであるから、教育に従事するものは必ず此の種

の靈研究をせねばならぬのである。

七、祖神の研究

今茲に教育に就て論説するに當りて、祖神と題する研究問題を提出するは、恰も教育家に向つて宗教を説かんとするか、の如き觀あるも決して左様ではない。教育者が兒童に眞の國家觀念を興へんと欲すれば、必然的に教育者自身が先づ眞に國家觀念に目醒めねばならぬ。其の爲めには、民族の祖神に就ての知識見解がなければならぬのである。是れ即ち祖神の研究と題して所信を述ぶる所以である。

親に對して不孝なるものは、君に對して直に不忠とはならないにしても、不忠者となる虞おそれは多分にある譯であつて、どの道人みちの誹せいは免れない。自ら教ゆる所の兒童をして不孝不忠の者にならしめざるやうに教育指導するのが教育者の任務である。元來孝と忠とは一貫するも

のである。故に孝の觀念のなきものは、不忠の人となり易きものなることは、今更云ふまでもなきことである。併し此の忠と孝との關係は數學的にわかるものではない。飽あくまでも靈的のものである。

非物質的即ち靈的、精神的に起る現象現象の原因結果が、數學的に現はれず、定規ていぎ的に發現せぬのは、其の現象發現の經路の觀察が不充分であるからである。此の觀察は困難なるが爲めに皆原因と結果とを不審とするのである。靈的現象の原因結果の説明はなかく、至難なる問題であつて、非物質科學研究の必要は主に之れが爲めである。其の研究の爲めには、精神運動の根本原動力である神に就ての研究を爲さねばならぬのである。

1. 神

通常我々日本人の神に就ての概念概念は、他の諸國人のそれとは異り、基

督教徒の如き理想神を神とするのでもなく、佛教の如き或る靈力所有者を神とするのでもない。神とは民族の祖ミコを神とするのである。是れが大和民族の神に對する眞の概念であるのである。然るに此の神に就ての概念は外來思想の輸入及び物質科學模倣等まほうの爲め一時國民の腦裡より忘却せられたのであつた。今や此の民族の祖神を眞の神とすると云ふ概念は年と共に再び大いに發達せんとする機運に際會したのである。

我々も亦此の概念を以て靈界研究を始めたのである。夫れには先づ從來靈媒れいばいを以て研究せる靈によつて、知り得られざる靈界の深い事情を研究したのである。其の際氣付いたことは此の靈媒に憑依ひきよする靈によつて靈界の研究をなさず、普通の靈を仲介とすることにより、更に靈媒などには直接憑依せざる高級なる靈と交通せしめて靈界を研

究し、又此の高級なる靈を以て、下級の靈の監視と取締りの任に當つて貫はうと云ふことであつた。

此の目的の爲めには、私は彼の、生前に於て至烈なる愛國心を以て國學研究に従事せられたる、平田篤胤あつたね先生を選んだのである。而して完全に平田篤胤先生の靈との交通の道が開け、茲に日を重ねるに従ひ、私共は靈界に於ける平田先生より、種々なる御教訓を蒙つたばかりでなく、政治、工業等の偉大なる大神たる言卷いはまくも畏かしこき八意思兼大神やごころおもひかねのおほかみの御所在に就ての御垂教ごすゐけうを乞ひ奉つたのであつた。而して先づ私共は文献を調査して御所在地と思はるゝ處は、皆調査して頂いたが、更に判明せぬのであつた。そこで私は平田先生に向つて、靈界より更に八意思兼大神の御所在をお探し下さらんことを切に御願ひ申上げた。然るに平田先生の申さるゝには、岸はまだ八意思兼大神は御存在あらるゝと

思ふか、自分も生前に大神の御存在を信じて探したが、終に判明せぬのであつた。又靈界に入つたならば大神にお會ひ出来るものと考へて居つたのであるが、現世を去つて靈界に入つてからも調査して見たけれども八意思兼大神は自分のお探し申上げた處では、何處にも坐ましなかつた。文献に八意思兼大神と記載してあるのは、天兒屋命あめのこやねのみことのことの書き誤りであらうと、今では余は思うて居るのであるが、岸は今でも猶八意思兼神は確かに坐ましますと思ふかと仰せられたのである。其の時私は平田先生に對して、天兒屋命は決して八意思兼神ではないと思ひます。自分が研究した處によれば天兒屋命は我々の理想に適あふ眞の神ではないと思ひますから、甚だ恐縮ながら今一應先生に靈界を調査して頂きたいと切に御願を致した處、先生はそれ程にまで云ふならば、念のため今一度調査して見ようから、暫く待てと仰せられたのであつた。

斯くして先生は私の切なるお願いをお聞き届け下さつて、靈界に於て一心に八意思兼神をお探し下さつたのである。ところが果して八意思兼大神は儼びとして眞神靈界に坐ましましたのである。而も大神は其の後眞神靈界より神仙界に現はれ給うて、先づ平田先生を種々お導みちびき遊ばし、先生をして終に四魂具足の神靈界に入らしめ神靈界に於ける眞の神々と接觸交通せしめて、神靈界を明かに知らしめられたのである。而して又私共は最初より此の平田先生によつて導かれて居るのであり、先生に絶對服従して居るのであるから、先生の經過遊ばされた通りの経験を同様に経験して居るのである。斯くして最後に我々は眞の神靈界と眞の神に就て平田篤胤先生より教へられたのである。斯くの如く神に就ての研究が進むと共に、從來より我々が神と稱し

て居るものに種々なる種類のあることを、規則正しく明かにすることを得たのである。

神と稱するものには種々あるも、單に其の靈體なるが故に、又靈妙の働きがある故に、神と稱するにあらずして、其の種々なる種類のあるのは、其の靈界の異なるに従つて生ずるものであることを理解せしめられたのである。即ち妖魅(動物靈界)佛魔、神仙、神靈の四界によつて大體四種の種々なる靈體の存在するものなることを確め、且つ眞の神にして唯奇妙な働きのみをするものはない。眞の神は神聖なる行動のみを爲すものなることをも知り得たのである。

更に研究を持續して行くうちに、神と民族との關係が明かになつたのである。此の關係を先づ充分明かにしたる上に於て、吾々は眞の信仰に進み得たのである。

2. 神と民族との關係

人が神として信仰すべきものは必ず民族的に關係ある神でなければならぬ。此の原則が實際に行はれたることを記録せられたる古記の判然としたものが存在するのは、我が日本のみである。元來此の種の古記は西洋にもあつたのであるが、唯物的智腦の發達につれ理想的宗教を設け神を案出せんとする際に、之れを廢滅せしめたのである。元來民族は其の祖神の異なるによつて、各異りたる民族を生ずるものである。此の事實は舊約聖書の中にも現はれて居るのである。例へば其の創世記の第十章に於て「ノア」の洪水の後、彼等の子等に就ての記録の内にも次の様な記録がある。

『彼始めて世の權力ある者となれり、彼はエホバの前にありて權力ある獵夫なりき。是故にエホバの前にある夫の權力ある獵夫ニムロ

デの如しと云ふ諺あり。彼の國の起初はシナル地のバベル、アツカ
 デ、及びカルネなりき。其の地より彼アツスリヤに出で、ニネベと
 カラの間なるレセンを建たり、是は大なる城邑なり。ミツライムル
 テ族、アナミ族、ナフト族、ハテロ族、カスル族、及びカフトリ族を生めり。
 又カスル族よりベリシテ族出たり、カナシは其の家子シドン及びヘ
 テエブス族、アモリ族、ヤルガシ族、ヒジ族、アルキ族、セニ族、アルワテ族
 ゼマリ族、ハマテ族を生めり、云々。

如斯く種々なる族は種々なる子より生れることを記録してあるが
 其の確證たるべき個々詳細なる實證は最早存在せぬのである。此の
 點に就て最も確實なる記録と實證とをもつものは我が日本である。
 故に日本國を知り日本帝國を眞に理解せんと欲するものは、其の民族
 と神との關係を明かに知らねばならぬのである。此の問題は、神と云

ふ文字を、直ちに所謂宗教と關係ある文字と解釋して教育に従事する
 ものによつて、未だ猶大いに注意せられざるのであつて、之れによつて
 生じたる惡習慣は速かに改めねばならぬことであると思ふ。兒童を
 して眞の國家觀念を發生蓄積せしむるには、日本國及び日本帝國の神
 と云ふものとの關係をば、教育者たるものが先づ充分に理解すること
 を要するものとするのである。

私の經驗によれば此の點に就て殊に注意すべきは基督教信者の教
 育者であると思ふ。夫れは日本の基督教徒はキリストなるものを唯
 一の神とし、日本人として大和民族の祖神を尊敬しようともせぬので
 ある。崇祖の意志と云ふものが絶對にない。而して又此の崇祖の意
 志なきものには忠孝の念も亦なしと云へるのである。故に斯る思想
 の所有者たる基督教徒に兒童の教育を爲さしむることは頗る危険な

るものであると思ふのである。此の種の危険は直ちに現はれざるものである故に人の注意を怠る處のものであつたのである。

我國の今日までの歴史に於ては、民族神と、普通に謂ふ所の神との關係を考慮して系統正しく記載せるものはない様である。併し古記によつて之を正しく系統を逐ふて認め得るものは我が古事記であつて、之れによつてのみ始めて眞の國家觀念を發揚し得るのである。

古記録に掲載せられたる天孫邇邇藝命の天降ります以前の日本の神々は、日本國土の神々ではあるが、決して大和民族の神々ではない。之れと同じく日本國は決して獨り日本帝國が獨占し來りたるものではなく、大和民族以前に種々なる民族が占有して居た時代があるのである。今日の考古學者は必ず此の觀念を以て觀察せねばならぬのである。今古事記によつて、此等の關係を詳述すれば大略次の如くである。

る。

後に日本國と稱せられたる地球上の東亞の一部分の天地の初發の時に、高天原に成りませる天之御中主神より伊邪那岐神、伊邪那美神に至るまでの神は、高天原とて純エーテル層中にましましたる神々である。

而して伊邪那岐神、伊邪那美神の二柱の神は高天原にまします諸の天神の命以ちて、其の當時エーテル層中に稍空氣の混せる多陀用幣琉國に天降りまし、淤能碁呂島を造營し給ひ、八尋殿を見立て給ひて、終に人種「島」を儲けられたのである。此の島なる人種は大八島國の各地に分布せられたのである。伊邪那岐神、伊邪那美神は島を生み竟へて、更に島の生活に必要な種々なる機關を主とする神を生みました。此の神の中には海の神だの水戸の神などがあるのである。又速秋津日

子神、速秋津毘賣神の如き河海の神、又天水分、國水分神、其の他の神を生み給ひ、

次に風の神、木の神、山の神、野の神等の多くの神を生みまし、終に伊邪那美神は火之迦具土神と謂す御子を生みますに因り、美蕃登炙えて病み臥せられ、次で三四の神を生みまして神避りましたのである。凡て伊邪那岐、伊邪那美の二神の共に生みませる島は十四、神は三十五柱であつた。

伊邪那美神の神避りましてより伊邪那岐神によつて成りました神は泣澤女神を始めとし、次で其の御佩せる十拳劍にも、亦此劍を以ちて殺さえまし、迦具土神の體の諸部にも種々なる神は成りましたのである。

伊邪那岐神は神避り坐した伊邪那美神を相見まく欲して、同じく靈

界であつて當時黄泉國と稱せられて居た、伊邪那美神が神避りて行かれたる處に追ひ行かれ坐した。行き坐して見るに、伊邪那美神の御靈體には八つの雷神が成りまして居たのである。斯くなりて居坐しても神避りたる靈は靈であつて、伊邪那岐神が見畏みて逃げ還ります時に、伊邪那美神は前の八つの雷神に千五百の黄泉軍を副へて之を追はしめ給うたと云ふのである。併し此の黄泉國と伊邪那岐神等の坐します時の神靈界との間には黄泉比良坂なる境界の坂があつた。此れは靈界の境界の坂に名けたるものである。此の時追はれたる伊邪那岐神は坂本の桃子三個を投げ給ふによつて助けられたる爲め、投げたる桃に意富加牟豆美命と稱する御名をば賜うたのであつた。

最後に伊邪那美神と伊邪那岐神とは黄泉比良坂に千引石を引き塞へて談判せられた。此の事ありてより伊邪那美神は黄泉大神と謂さ

れたのである。

此の時代は人のことはまだ更に記録されて居ないのであつて、總て原始時代に、神が空氣の少量に存した時代の靈界に活動して居らるゝ現狀を表はされたるものである。此等の神の靈界は決して純エーテルの靈界即ち高天原ではないのである。此の時代に此の如き靈界と高天原とは高さに於ては實に僅かの差あり、空氣層の出來て居た靈界は、地上では殊に低地にあるのみであつて、高地は皆高天原に屬して居たのである。故に伊邪那岐神は兩靈界をば便宜に容易に交通して居給うたのである。

伊邪那岐神は此の地上の靈界にましまして詔り給ふには、吾は伊邪志許米、志許米岐穢き國である黄泉國に在つた故、我身の禊爲さむとて竺紫の日向の橋の小門の阿波岐原に到り、禊ぎ祓ひをなし給うたので

ある。今日人が信仰上穢れたるものを祓式によつて清め得ると云ふ觀念の生じて之を實行して居るのは、伊邪那岐神の此の御行動が原因であるのである。

此の伊邪那岐命の身に著ける物を脱ぎ給うた時、成りました神は十二柱の神であつた。

又此れに次で川の中ツ瀬に墮り迦豆伎て種々に滌ぎ給うた時に成りませる神々は八十禍津日神、大禍津日神、神直毘神、大直毘神、伊豆能賣神等であつた。此等の神の内四柱の神は、吾々は現に祓戸四柱の神として崇敬して居るのである。即ち其の神は伊邪那岐神が此の時祓ひ滌ぎせられた時に成りました神であるのである。

次には水底水中、水上に滌ぎ給ふ時に成りませる七柱の神があつたのである。就中綿津見神をば、先住民族の中には祖神として齋くもの

もあつた様であつた。併し大和民族とは更に關係はないのである。夫れは大和民族の大祖神たる天照大御神の成りませる以前に現はれました神々であるのである。茲に先住民族と云ふも其の民族は伊邪那岐、伊邪那美神の生みました島族の形成せる民族であるのである。即ち我國の原始民族であるのである。

伊邪那岐神は最後の祓ひのとき、左の御目を洗ひたまひし時に、天照大御神は成りまし給ひ、右の御目を洗ひたまひし時に月讀神は成りまし給ひ、次に御鼻を洗ひたまひし時に、建速須佐之男神は成りましたのである。此の三神は伊邪那岐神の禊によりて成りました終りの神である。

此の最後の三神を得給うたことは、伊邪那岐神の太く歡喜ばし給うた處であつて、天照大御神には、「汝が命は高天原を知らせ」と事依さし

賜ひ、月讀神には「汝が命は夜の食國を知らせ」と事依さし給ひ、建速須佐之男命には「汝が命は海原を知らせ」と事依さし給うたのである。

此の時此等の神々に對して伊邪那岐神の事依さし給うた處のものは、明かに古事記に記録せられて居るのである。而して其の事依さし給うた處の意味によつて當時の靈界の有様を想像することを得るのである。

當時の靈界で最も勢力ある大なる靈界は何んと云つても高天原である。何物も混入せぬ純エーテルの高天原は靈界の最も廣大なる範圍を占めて居つたのである。此の時代の高天原とは高山、高原地は其の領域内に屬し、其の下部にはエーテル中に空氣を混入した一靈界があつて、後に之れを葦原中國と云うたのである。其の中には、島の後裔が生息し、神も亦之れに伍して活動せられて居た靈界があり、其の靈界

は伊賦夜坂を以て隔てられたる黄泉國であつたのである。黄泉國は後に人の世が出来る時が来て妖魅界と名けらるゝ様になつたのである。

伊邪那岐神の三柱の御子等は各々神の依さし給へる命の隨に皆知ろしめし給ひし中に、獨り速須佐之男命はよさし給へる國を知ろし召さずして、八拳鬚心前に至るまで啼き伊佐知てあられた。故伊邪那岐大神は速須佐之男神に「何とかも汝は事依させる國を治らさずて哭き伊佐知流」と詔り給へば、速須佐之男命は「僕は妣の國根の堅洲國に罷らむと欲ふが故に哭く」と申したまうた。爾に伊邪那岐大神は大きく忿怒らして「然らば汝は此の國にはな住みそ」と詔りたまひて、命をば神夜良比に夜良比給うた。

曩きに黄泉國と名けられて居た國は、此の時には根之堅洲國と名け

られて居たのである。此の時に、伊邪那岐神や速須佐之男神等が居られ坐した靈界は、エーテルの世界に空氣を混じ地上僅かに高く存在し、其の上に純エーテルの靈界である高天原があつたのである。而して其中に根之堅洲國があり、此の兩者は互に隔てられ唯伊賦夜坂にて交通し得て居たのである。

此の事あつて後、速須佐之男命は天照大御神に別れを請して罷らむと、高天原に上り坐した。其の時異常の變動があり、天照大御神と速須佐之男命と御對面の上御談判があつた。終に天照大御神は速須佐之男命に汝は邪き心無しと云ふも、其の心の清明きことは、何を以て知らましと詔りたまうた時に、於是に速須佐之男命は各々宇氣比て子を生ま見て見んと答白へ給うたのである。

斯く誓はれて天照大御神は先づ速須佐之男命の十拳劍を乞ひ受け

て、佐賀美邇迦美て三女神の成りませるあり、速須佐之男命は天照大御神の左の御美豆良に纏かせる八尺勾瓊の五百津の美須麻流珠を乞ひ受けて正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命を、亦右の御美豆良の珠を乞ひ受けて天之菩卑能命を、亦其の他の珠を乞ひ受けて佐賀美邇迦美て天津日子根命、活津日子根命、熊野久須毘命等總て五柱の男子の神等が成り坐したのである。

此の時天照大御神が、速須佐之男命に成りました五柱の男子は、其の物實我にあつたに因り、成りました神は吾が子であると云はれたのである。此の事が後に速須佐之男命の御機嫌を損じたものゝやうである。後に速須佐之男命が勝左備て、天照大御神の營田の阿離ち、其の溝を埋め、亦其の大嘗聞こしめす殿に屎麻理散らしなぞせられたるは、之れが爲めであつたと思ふ。尙益々勝左備て天の斑馬を逆剥ぎに剥ぎ

て忌服屋の頂より落し入れ、天衣織女を驚かして死せしめ給ふなどのことありて、終に天照大御神は天石屋戸を閉ぢて刺し許母理坐したのである。

之れによつて爾ち高天原皆暗く、葦原中國悉に闇く、爲めに常夜往く有様となり、萬の神の聲は狭蠅なす皆湧き、萬の妖悉に發るに至つたのである。

此の時彼の有名な高御産巢日神の御子思兼神の御謀りによつて、天石屋戸開きの御神事が行はれたのである。而して之れによつて天照大御神は天石屋戸を出でました時に、高天原も葦原中國も自ら照り明るくなつた。

此の時の靈界には高天原と、葦原中國と根之堅洲國の三界があつたのである。

此の一大騒動のあつた後、八百萬の神は共に議りて、速須佐之男命に千位置戸を負はせ、亦鬚と手足の爪とを切り祓へしめて神夜良比に追はしめられたのである。

速須佐之男命は此の追はるゝ前に高天原に於て大宜津毘賣に食物を乞ひ給ひ坐した。大宜津毘賣は種々作り具へて進る時に、其の様を立ち伺ひて、其の大宜津毘賣神をば殺し給うた。其の殺さえたまへる神の身に生れる物に蠶、稻種、粟、小豆、麥、大豆等が在つた。此れは高天原に於ての此等のものゝ種子であるのである。

それより速須佐之男命は追はれて、高天原より葦原中國の肥の河上なる鳥髮の地に降られ、其處で足名椎、手名椎の老夫婦と、女の櫛名田毘賣に會せられた。此の夫婦は島の後裔で足名椎は大山津見神を親とするものであつたのである。

此の出雲國を今の出雲國の地點に當て篋めて説明せんとした學者は尠くないが、此の時代は神代であり靈界であるのであるから、今の地點と決して全く一致するものではないのである。

速須佐之男命は此處で此の三人のものに面會せられたのが縁となり、櫛名田毘賣と目合ふ約束をして、八俣遠呂智を切り散り給うたのであつた。此の足名椎、手名椎などは決して大和民族ではない。此の時の速須佐之男命の御働きは葦原中國にてせられたのではあるが、決して日本帝國民とは關係はない。日本國土の先住民族と關係があるのである。

速須佐之男命は八俣遠呂智を退治して後、櫛名田毘賣と目合ひ坐して出雲國須賀の地に始めて宮作りして坐しました。有名な八雲立つの歌も此時出來たのである。此の時のことも人代らしく云ふものも

あるが決して人ではなく、皆靈界の靈體であり、神であつたのである。故に其の歌の意味の解釋かいしゃくも其の積りで解釋せねばならぬのである。

神には死と云ふことがないから、其の神かみ避さらるゝまでは、其の子孫が何代續いても、初代の神が其の族を代表せられるのである。而して此の時代に勢力のあつた須佐之男神系の神々は、其の當時の民族を同化支配せられて居給うたのである。其の當時の民族は人の形を有する様であつても、靈界に住せし靈體であつたのであるから、其の遺跡は部分的に現存するのであつて、之れを吾人はコロボツクル民族と稱するのである。我國に於て考古學者が神代の靈族を大體現民族と同一に考察斷定することは大なる誤解であつて、物質界あつて非物質界あるを知らざる科學者の弊いである。我國のコロボツクル時代は神代即ち靈界時代であつたのである。

而して神代と雖も今日の物質と稱するものは存在しては居つたに相違ない。併し靈界に於ては之を物質としては認められないのであつて、其の物の素質中にエーテルは浸潤しんじゆんして居り神靈は其の中のエーテル状態の差異を認めるのみであつたのである。物質的世界に於ては之れに反して其の中のエーテルは少しも認めずして、唯物質を認むるのみである。此の種の觀察の差異は、獨り民族史に其の事實が證明せられるのみではない。我國に於ては神代より傳へられた三種の神器は鄭重に傳承せられて、今日では物質的に御神器とせられて居るのである。

以上須佐之男神の一系は當時の民族の祖神として、日本國の古き時代の神代の神として、此れより以前の諸の神々と共に、爾後じこも民族間にありて活動せられ、其の状態は今日大日本民族の古記にも明かに記録

せられ尊敬はせられて居るのである。

一〇〇

其の中に在つて大年神は須佐之男系第三世の神であられたが、其の多数の御子等は、後日彼の神佛習合に深く關係せられたのである。

佛教徒が神佛習合の如き奸策を以て我が大和民族時代に神靈の稜威を滅却せんとしたのであるが、我が國の或る先住民族と固有の關係を有せらるゝ祖神等は、容易に習合せられず、唯佛教徒がそれ等の神々に對し別に佛名を附加し奉つた程度であつた。唯其等の神の中で正系以外の神々は習合後、全く佛名を以て常に奉祀せられ、之に満足せられて居る神もある様に見受けられるのである。

例へば大年神には、大國魂神、韓神、曾富理神、白日神、聖神、大香山戸臣神、御年神、奥津日子神、奥津比賣命、大山咋神、庭津日神、阿須波神、波比岐神、香山戸臣神、羽山戸神、庭高津日神、大土神等御子十七神あり、其の中には今

日には殆んど佛名を以て世に現はれ、其の本名の知れざる神も尠くないのである。此等は佛者の行うたる神佛習合兩部神道なるものゝ罪惡である。吾人は之が研究に多年の歳月を費して居る者であるが、今其の中より判然確定せる一二の例を擧ぐれば左の如くである。

不動尊—又不動明王は日本全國到る處に祭祀せられてあるが、佛のやうでもあり、又神のやうでもある神である。此の神の本體に就て知れる人は殆んどあるまい。此の不動尊と稱せられて居る神は、大年神の第十五番目の御子神、羽山戸神が習合せられてあるのである。

地藏尊—は之亦奉祀されざる處はない。又地藏菩薩とも稱せられて居るが、我が國の地藏尊とは佛教の經文にある地藏菩薩を祭祀したもののゝみではない。我國の各地方の土地監理の神として配祀されてあつた、大土神を地藏尊の形に變形し改稱したのである。

藥師如來——と稱せられ日本國中何れの地に於ても祭祀せられ居る神も、神佛習合の邪神道に於て佛徒が奉祀したる大年神の御子神である。即ち第十二子阿須波神であるのである。

帝釋天——は各地方に於て祭祀されて居るが、東京地方では柴又の題經寺が最も有名である。此の帝釋天なる名稱も亦神佛習合神道に於て、佛者が大年神の第十四番目の御子香山戸臣神に與へたる佛名であると云ふのである。斯くの如きの神は其の他にも猶多數にあるのである。

斯くの如く深く佛教に習合せられて、今猶ほ少しも其の本體を現はさずして、變名を以て人に信仰せられて居る神々の本體を明らかにすることによつて、大和民族の信仰の正邪が自ら明らかになると思ふのである。現時の大日本帝國を構成せる大和民族の前には大國主神の

支配せられたる先住民族があつたのである。之をアイヌ民族と云ふのである。

此のアイヌ民族は日子番能邇邇藝命の魂によつて同化せられ大和民族となつたのである。民族同化と云ふことは物質科學者の想像し得ざる事實であつて、之れを一般に信仰によるもの位に解釋して居るのであるが、此の同化は血液型に於て物質科學的實驗に明瞭に現はるゝのである。

八、同化と血液型

人種と血液型の研究は人の大いに注意する所となり學者が熱心に行うて居る處である。私は民族同化と血液型との關係に就て記すに當り、世人の研究せる人種と血液型との關係に就て先づ少しく述べて見ようと思ふのである。

一九一九年ポーランドの Hilsfeld ヒルシフェルド氏は其の夫人と共に世界大戦に集れる十六ヶ國の軍隊八千數百名の血液型を檢査した。今其の報告を見れば次の表の如くである。

第一表

人種	血液型					人数
	O型	A型	B型	AB型	その他	
イギリス人	四六、四	四三、四	七、二	三、一		五〇〇

フランス人	四三、二	四二、六	一一、二	三、〇		五〇〇
イタリア人	四七、二	三八、〇	一一、〇	三、八		五〇〇
ドイツ人	四〇、〇	四三、〇	一一、〇	五、〇		五〇〇
オーストリア人	四二、〇	四〇、〇	一〇、〇	八、〇		五〇〇
アルガリア人	三九、〇	四〇、六	一四、二	六、二		五〇〇
セルビア人	三八、〇	四一、八	一五、六	四、六		五〇〇
ギリシヤ人	三八、二	四一、六	一六、二	四、〇		五〇〇

以上の型を歐羅巴型と稱す。

トルコ人	三六、八	三八、〇	一八、六	六、六		五〇〇
アラビア人	四三、六	三二、四	一九、〇	五、〇		五〇〇
ロシア人	四〇、七	三一、二	二一、八	六、三	一、〇〇〇	五〇〇
ユダヤ人	三八、八	三三、〇	二三、二	五、〇		五〇〇

以上を中間型とす。

マダカスカル人	四五、五	二六、二	二三、七	四、五	四〇〇
黒人	四三、二	二二、四	二九、二	五、〇	五〇〇
安南人	四二、〇	二二、四	二八、四	七、二	五〇〇
印度人	三一、三	一九、〇	四一、二	八、五	一、〇〇〇

以上を亞細亞、亞弗利加型とす。

而して又多數の人の實驗によれば、血液型は規則正しく遺傳するものであること、及び血液型は氣候風土食物等の影響は蒙らぬものであることは既に證明せられて居る様である。併し吾人の見る處によれば之れは同化によつて主に變化するものゝ様である。今之れに就て詳細に述ぶるに先ち、一般に人の稱ふる處のことを今少しく述べる必要がある。即ち、

O型のもは自信力が強く、意志強固にして、物に動することなく、理

智的にして、感情に驅らるゝことなく、精神力旺盛にして、決心して後

迷はざるの性質を有す。

A型のもは濃厚従順にして、事を爲すに慎重、細心、謙讓の徳を有し、反省的感動的にして、同情心及び犠牲心に富み、融和的である。

B型のもは、淡泊、快活にして、活動的であり、刺戟に應ずること速かにして果斷性あり、社交的、樂天的にして、物事を長く氣にせざる性質を有する。

AB型のもは、A型のもと、B型のものゝ兩氣質を併有するが如くにして、一般に外觀上はB型にして内面にはA型氣質を有するもの多し。例へば外面的にはB型の長所短所を有し、内面的にはA型の長所短所を有するものは、快活磊落なれども一面用心深き處あり。果斷なれども一面動搖し易し。

と云ふのであるが、稀には内外共にA型的に見ゆれども、幾分B型的の長所短所を有する點に於て、A型者とは異なるものあり。例へば用心深けれども、一面思ひきりよく、温厚なれども一面誇張的なることあるなり。例へば白耳義人と露西亞人を比較すれば次表の如くである。

第二表

人種	O型	A型	B型	AB型	人数
白耳義人	四七、九	四一、八	七、一	三、二	一、〇七二
露西亞人	三四、六	三八、四	二一、三	五、七	二、一〇七

此の表によつて見れば白耳義人はO型が多く精神力旺盛にして、A型の多きは従順性多く、之れに反して露西亞人は、性質多感にして、動搖する。O型少くB型多くして多血質であると云ふ。

次に支那人と英國人とを比較するときは、次の如くである。

第三表

人種	O型	A型	B型	AB型	人数
支那人	三二、六	三一、四	二七、三	八、七	四、四二八
英吉利人	五一、四	三四、八	九、八	三、九	三、八九九

此の表によつて見れば、英吉利人はO型多く、性重厚、冷靜にして、實利主義であり、外界に打ち勝つ性質を有し、此の性質は三二、六の數を有する支那人には反對に少いのである。支那人にはB型が二七、三の多數あるが故に、誇張的にして感情的であるのである。而も此れは山東省では三六、八山西省では四七、五%あると云ふのである。

又佛蘭西人と伊太利人の血液型は大體相一致し、其の性格も殆んど

一致して居るのであつて、其の表は次の如くであると云ふ。

第四表

人種	O型	A型	B型	AB型	人数
佛蘭西人	四三、一	四三、八	一〇、六	二、五	五〇〇
伊太利人	四二、〇	四二、一	一一、六	四、三	一九三二

其の他種々なる人の試験によつて、彼等の唱ふる民族性は、大略次の如く決定することが出来るると云はれて居るのである。

- (一) 民族性は第一義的には、其の民族に於ける血液四型の頻度によつて規定せらるゝと見ることが出来る。
- (二) 従つて右民族に於ける血液四型の頻度の相違は、夫れ等の民族性の相違を結果する最も重要な事情の一である。

以上は血液型に就ての物質科學者の大體の觀察である。今之を非物質科學的に觀察するときは如何であるかと云ふに、吾々の研究によれば四つの血液型は四魂と關係があると云ふのである。

人の精神即ち靈魂を形成する四魂が其の配合に於て變化を生じたときには、管に其の人の性質を非物質的に變化するのみでなく、其の變化によつて物質的にも何等かの變化を起さねばならぬ筈である。吾々は從來此れが発見に苦心して居つた。顔貌の變化などの研究も其の爲めであつた。然る處今其の四魂の變化は血液型に於て現はるゝことを教へられたのである。即ち、

- O型は 幸魂
- A型は 荒魂
- B型は 和魂

又熊本人に就てもO型の如きは。日本人平均より著しく小數である。故に感情的であると云ひ、又熊本人はB型に於ても大いに減少して居る。故に消極的保守的であると云うて居るのである。今之れを同化による變化として觀察するときには興味ある現象たることを認むるのである。

民族の血液型は祖神の同化によつて變化するものであることを容易に證明し得るものは、恐らくは我々日本人あるのみである。之れは民族同化の歴史が嚴然と古事記に記載せられて存在する故に之れを爲し得るのである。

之れを研究することは吾人の責任であるが、今猶ほ完成し得ぬのであることは甚だ遺憾である。多くの日本の學者は同化と云ふ意味をば全く理解せず、又眞の大和民族の血液型に就ての理解なく、日本各地

の人の血液型を檢查して、文化の單なる影響を測定しようとして居るのである。

又現時の科學者には民族同化に就ての知識はなくとも、唯民族質と云ふものゝあることを認めて種々研究して居るものがあるのである。而して民族の心理に影響を及ぼすべき種々なる原因を研究しても、其の影響する處は皆一時性であつて、民族質の根本的要素には殆んど觸れないものであることをば認めて居るのである。

元來此の根本要素とは民族魂を云ふのである。而も此等の學者は民族魂の同化と云ふことを知らざるが故に、民族性と云ふものは、唯時と共に僅かに變化することはあるものゝ様であると云うて居るのである。之れに就ては大略左の如く考へて居るようである。

一、國民の生活に於ける思想の勢力

二、文明の進化に於ける宗教的信仰の勢力
三、國民歴史に於ける偉人の勢力

此等の勢力が作用するときには、民族性は變化するものであると考へて居る様であるが、此の觀察は皆唯末梢的の變化を見て推定したものである。民族性の變化は血液型の上に之を認め得るものであるが、其の血液型の變化と云ふものは神の同化によつて起るのみのものであることを學者等は知らぬのである。

神の同化によつて血液型の變化の起ると云ふことは、今は獨り之を日本人が實際證明し得るのみであると思ふ。而も之を證明するには其の試験材料は物質科學者の發表せし材料を以て容易に證明し得るのである。

前にも述べたるが如く、大和民族は邇邇藝命の魂の成りました御子

神によつて、アイヌ民族より同化せられたるものである。之れによつて大日本帝國は構成せられて居るのである。然れども各地の日本人の同化の程度は一樣ではなく、各地方によつて、濃淡が存するのである。其の同化の濃淡は各地方の人の血液型を檢查することによつて確實に檢定し得るのである。

又之が對照とすべき同化を被らざるアイヌ人は、今猶現に北海道に生存して居ることは、之れは頗る重要な材料であるのである。

今、日高アイヌに就て二宮氏及びGrove氏等が檢查し、又十勝アイヌに就て中島氏の研究せられたるものを表示すれば次の如くである。

第六表

人種	O型	A型	B型	AB型	人数
日高アイヌ	二二、〇二	三三、三三	二九、九三	一四、六八	五〇九

十勝アイヌ平均	二五、五三	三〇、八〇	三八、六〇	五、一五	二二七
平均	二三、七八	三二、〇七	三四、二七	九、九二	計 七三六

此の表によつてアイヌ民族の血液型は之を一般人が日本人の血液型数とせるものと比較しても、著しき差違あることを見るものにして、之を對照するときは次の如くである。

第七表

人種	O型	A型	B型	AB型	人数
日本人平均	三一、〇〇	三八、二〇	二一、二〇	九、六〇	二〇、二九七
アイヌ平均	二三、七八	三二、〇七	三四、二七	九、九二	七三六

今此の表によつて見るときは、アイヌ民族はO型に於て大いに少く、A型に於ても亦稍少く、之に反してB型に於ては非常に多數である。

斯る血液型を有せしアイヌ民族の同化せられたる現時の大和民族は右の平均数の如き血液型となつて居るのである。

併しながら大和民族の眞の標準たるべき血液型の比例は、一般に人の云ふ日本人平均頻數よりは少しく異なるのである。此の日本人平均頻數とは日本國中に於けるもの、平均數である。即ち完全に同化したものと、難同化のもの、平均數である。

文學士古川竹三氏が日本の文化は、九州より東北に順次に及んだものとして九州、關西、關東、東北に亘りて血液型の變化の狀況を表示せられたものがある。其の表は次の如くである。

第八表

地方	O型	A型	B型	AB型	人数	調査者
青森	三五、八	三一、三	二二、三	一〇、四	六九	岸氏

秋	盛	仙	山	茨	千	埼	東	神	愛	岐	京	大	岡	吳
田	岡	臺	形	城	葉	玉	京	川	知	阜	都	阪	山	
三一、四	三四、九	三一、〇	三〇、五	三二、六	三八、〇	三三、〇	三一、七	三五、〇	三二、〇	二七、二	二八、七	三〇、八	三一、六	三〇、三
三四、二	三六、七	三八、二	三四、七	三六、三	三〇、〇	四〇、〇	三七、七	三三、〇	三八、四	三七、八	四一、七	三八、一	四一、三	三八、二
二四、七	二二、〇	二〇、四	二六、四	二五、三	二二、〇	一九、〇	二一、三	二二、〇	二一、〇	二二、九	二〇、二	二三、八	二〇、八	二四、三
九、五	六、二	一〇、六	八、二	五、八	九、〇	七、〇	九、五	八、〇	八、七	一一、〇	九、四	七、〇	六、三	七、二
二五一	三八六	七九三	七八六	一三八	一四四	一二三	一〇九七	一二四	一二六四	二〇九	五〇九	九六八	三八〇	三五三
岸氏	岸氏	松原、二宮氏平均	岸氏	岸氏	平野、矢島氏	平野、矢島氏	中島氏、白井氏及平野、矢島氏平均	平野、矢島氏	岸氏及河石、古橋兩氏平均	岸氏	中山島氏	小山内、岸兩氏平均	岸氏	阿部氏

通常、人の言へるが如く大和民族の文化は九州より東北に及んだものとする順序に、調査成績を排列したものが上表の如くであるのである。併し實際民族の同化と云ふものは人の言ふ處の文化と同一氣流に行はるゝものではない。アイヌ民族は地方によつて其の民族魂の性質を異にし、同化せらるゝ年月の長短を異にして居るのである。神武天皇以前の神代の天皇等も日本各地に於て各々同化に力められたのである。故に血液型は各地に於て自然差違があるのであつて、前に掲げたる日本人平均數のO型三一、〇A型三八、二B型二一、二AB型九、六なる數は眞の大和民族の血液型を現はすものではないのである。

福	熊	鹿
岡	本	島
二二、七	二二、三	二八、五
四五、八	四七、七	三七、五
一九、七	一四、六	一八、八
一〇、七	一五、四	一五、四
三五七	一三〇	二八五
鳥井、深町、古市三氏平均	古市氏	古市、岸兩氏平均

眞の大和民族は大體次の如き血液型數を有すべきものであると云ふことである。

第九表

O 型	三二、〇	A 型	三七、〇—三八、〇	B 型	二二、〇—二三、〇	AB 型	九、〇—一〇、〇
-----	------	-----	-----------	-----	-----------	------	----------

今之れを以て大和民族の定型血液型數として前表に表はれたるものを觀察するときは次の如きを見るのである。

九州の福岡、熊本、鹿兒島に於てはO型數は皆著しく小にして、之をアイヌ人の平均二三、七八に比して熊本に於ては之より稍少く、鹿兒島に於ては稍多し、然れども大和民族の固有數に比すれば著しく小數である。之を大和民族に完全に同化するときは三二、〇に増加せねばならぬのである。此のO型は幸魂にして産業の發達に資する。之は競争心

を以て他を征服し、自信力強く自己を頼みとして働くものである。之と他の三魂が具足して始めて四魂具足となるのである。西洋人大部のO型は四〇、〇以上であり、殊にイギリス人の如きは五一、四の多數にして、之を以て理想的血液型なりなどと云へども、此れは四魂不具足の物質的我慾的の幸魂の發露であつて、今や物質文明も既に其の極點に達し、將に四魂具足の精神文化が大いに世界に雄飛せんとするの時に於ては、O型の多數なるは大いに考慮せねばならぬこととなるのである。況んや臺灣の生蕃の血液型がO型の多數なるを見ては、四魂具足によつて適當なる標準型に至らざる可らざるを見るのである。

第十表

生蕃	O 型	A 型	B 型	AB 型	人數	調査者
Bunun	四三、三九	三四、〇四	一七、七九	四、七九	二二八	古市氏

Tsuon	五八、〇五	二九、二〇	一一、四八	一、二八	三九四	桐原、古市二氏 桐原、白、古市 桐原、平均、古市 桐原、古市二氏 平均
Paiwan	四五、四七	一四、九四	三三、〇一	六、五九	三八四	
Formosan	四三、九九	二六、八六	二二、二六	六、九〇	六五八	

斯くの如く生蕃の中にも歐洲人と同一のO型數を有する種族はあ
るのである。此等も同化によつて偏れる數字を減少し、四魂具足に至
らしめねばならぬのである。

今生蕃に對照して歐洲の主なる血液型を擧ぐれば次の如くである。

第十一表

國人名	O型	A型	B型	AB型	人數	調査者
Schweden	四〇、一	四六、三	八、九	四、六	一、二八四	Biz氏外二名ノ 調査 Snyder
Holländer	四二、〇	四四、〇	九、〇	五、〇	二〇〇	
Österreich	四二、〇	四〇、〇	一〇、〇	八、〇	〇	Landsteiner

Franzosen	四三、一	四三、八	一〇、六	二、五	五〇〇	Hirszfeld
Belgier	四七、九	四一、八	七、一	三、二	一、〇七二	Staquet
Nordamerikaner	四六、三	三八、九	九、五	五、二	二、五三六	Buchanan, Higley
Schotten	四三、二	三七、〇	一三、八	六、二	二九七	Dyke, Alexander
Engländer	五一、四	三四、八	九、八	三、九	三、八九九	Hirszfeld 外七名
Jsländer	五五、七	三二、一	九、六	二、六	八〇〇	Jonsson

此等の表によつて見れば、O型は歐米人も臺灣生蕃人も殆んど同一
である。其の異なる點はA型とB型の多少であつて、AB型も殆んど同一
であることを見るのである。即ちA型は歐米人は生蕃に比し頗る多
數なれども、B型は非常に少く歐米人は生蕃の約半數である。

今此れを大和民族の血液型の定型に比するに、大和民族のO型は歐
米人や生蕃人より著しく少く、僅かに三二、〇位である。歐米人は四魂

不具足に物質慾に富むか、生蕃の如く個人慾に勇猛であるのである。
生蕃人の首狩りは西洋人の利慾であるのである。

A型は歐米に於ては多く、臺灣の生蕃に於ては僅かに其の半數であるのである。此れはアイヌに於ては三二、〇七あり、大和民族の定型は三七、〇―三八、〇である。此のA型は荒魂あらいたまであつて、アイヌや生蕃には荒魂が欲如して居たのである。併し國民の荒魂や幸魂だけ大いに發達しても、四魂不具足であるときは決して完全なる國家は成立せぬのである。

又B型は大和民族に於ては二二、〇―二三、〇を有すべしとせられるけれども、歐米人は一〇、〇以下であることを通常とする。B型は和魂にぎたまにして歐米人は眞の平和心を有せぬのである。四魂具足には和魂が不足して居るのである。

又AB型は大和民族には九、〇―一〇、〇であるが、歐米人は約其の半數である。ABは奇魂くしたまであつて歐米人には之は缺如して居るのである。

學者の中には日本人と歐米人との血液型の差異を見て直に歐米人を稱して理想的血液型の人類の如く稱揚するものあれども、之れは大いに早計の批判と思ふのである。物質文化のみを理想として觀察すれば、或は左様の感が生ずるやも知れざれども、今や將に精神文化が大いに發達せんとせるに際しては、物質精神兩文化の併立を理想とせる大和民族の血液型が眞の理想的のものである。世界の民族は悉く之れに同化せらるゝ時あるやも知れぬと思ふのである。

九、アイヌ民族

民族なるものは決して只單に或る人類が集合して團體を形成したものでないのである。現に人が或る集合團體を形成するにしても、必ず其の發起者がある如く、民族形成にも必ず此の發起者に相當する神があるのである。我々大和民族のすぐ前の民族たるアイヌ民族にも明かに其の發起人に相當する神があるのである。其の神を大國主神と云ふのである。

速須佐之男命が高天原より葦原中國に神夜良比に追はれて、出雲國に天降り、地上なる島の後裔を御子孫と共に同化せられて、全く須佐之男神流に前住民族たるコロボツクル民族を形成し民族王となつて、其の御子孫と共に七代を經過せられた時、第七代の天之冬衣神は刺國

若毘賣に娶ひまして大國主神を生み坐した。此の大國主神は亦の名を大己貴神、葦原色許男神、八千弋神、宇都志國玉神、又其の和魂をば大物主神など云ひ、順序よりすれば須佐之男神系の第八代に當られる神であつたのであるが、此の神は壯年時代より才幹拔群の神であつたが爲めに、其の兄弟たる須佐之男神系から遠ざけられ須佐之男神系を去つて大國主神の別系統を造り、先に須佐之男神等によつて同化せられた民族をば、更に大國主神流に同化するに至り、この大國主神の子孫によつて同化せられたる民族をアイヌ民族と云ふのである。

大國主神が須佐之男神系より避けられたるは、自ら避け給うたのである。く避けしめられたものではあるまいか。其の端緒は八十神等と稻羽の八上毘賣を婚はむと競はれた時に始まり、八上毘賣が「吾は汝等の言は聞かじ、大己貴神に嫁はな」と言はれたので、八十神は大己貴神をば

殺さんと共謀り種々なる方法を講じて追ひ攻むるが爲めに、大屋毘古神の「須佐之男命の坐します根堅洲國に參向てよ、必ず其の大神謀りたまひなむ」と教へらるゝに任せて趣かれた。此の時速須佐之男命は根堅洲國即ち彼の黄泉國に坐しまして居られたのである。八十神が不法な行爲をされたのは、速須佐之男大神が神避り坐して既に黄泉國に入られて居たので、統一が失はれて居たからであり、其の不法行爲の爲めに大國主神は避らしめられたのであつたと思ふのである。

大己貴神は黄泉國の速須佐之男神の處に行つて、其の女須勢理毘賣と目合して相婚ひ坐し、終に須勢理毘賣を携へて彼の黄泉比良坂を抜け出で葦原中國に歸り出で給うた。

一方八上毘賣は先の期りの如く、大己貴神に美刀阿多波志だが、其の嫡妻須勢理毘賣を畏み恐れて、其の生みませる子を木の俣に刺して歸

り坐した。而して其の子を木俣神と云ひ、又御井神とも云ふのである。

其の他大己貴神が高志國に沼河毘賣を婚ひに幸行でまし、又は出雲より倭國に上り坐むとせらるゝ時の種々なる物語等は、皆民族同化の爲め御活動遊ばした時のことどもであつたと考へればよいのである。

此の大國主神等はアイヌ民族の爲めには其の祖神として偉大なる御力のあつたことは、我々大和民族に最も近き先住民族の遺跡等に於て、今日大いに認めざるを得ないのであるが、殊に人代となり、大和民族が誤つて此等のアイヌ民族の祖神をば、同じく大和民族の祖神として祭祀するの習慣があつたので、種々なる方面より此の神の遺跡は傳へられて居るのである。

而して種々なる方面より之を調査するときは、此の大國主神は主として和荒二魂を有された神であつたのである。此の二魂主義を以て

國家を統制することの難かしいと云ふことは、既に此の神代時代に於て示されて居ることを、吾人は古事記の上に見るのである。實際大國主神は其の至難なることを愁ひ給うて居られたのである。故に高天原の神等の方では、之れが爲めに、大國主神の國土經營に少名毘古那神を與へられたのであらう。此等の事實によつて觀れば、後に四魂具足主義を以て治め給ふ天照大御神の出で給うたのは、高天原の神々の御神策であつたのは明かである。

一〇、大和民族

伊邪那岐神より海原を知らしめせと事依さし給うてより、高天原に上りて種々なる出來事を遊ばした速須佐之男神は、終に夜良波禮て海原即ち葦原中國である出雲國に天降りました。要するに命の本分の土地に出で給うたのである。而して須佐之男神の御系統の神が當時の海原たる葦原中國を統治召されたのである。須佐之男神は決して高天原の神ではなかつたのであるが、當時高天原を知しめして居られた天照大御神は、前に須佐之男系の神々によつて統治せられ、後大國主神によつて統治せられて居た、葦原中國の状態を見給ひ、

豐葦原之千秋長五百秋の水穗國は、我が御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の所知國、

と言因さし給ひ、時を経て其の御子たる日子番能邇邇藝命を天降したまうたのであつた。併し神々を高天原より葦原中國へ天降し給ふ爲めには、種々なる手段が行はれたのであつた。今其の大略を述べれば次の如くである。

即ち葦原中國を高天原の天照大御神の御子孫を以て統治せしむるには、先づ時の統治者たる大國主神及び其の子孫の神々等の承諾を得ねばならぬのであつた。

此の際天照大御神の御採り遊ばした手段は、蓋し獨り此時に於てのみ必要であつたものではない。今日の時代にも此の手段は用ひられて居るのである。天照大御神の此の御手段は、先づ日本國平和の爲めに葦原中國に向つて試みられ、次で亦大和民族の發展と、日本帝國の形成によつて、大八島國の統治平和は求め得られたのである。現時天照

大御神の御神威即ち高天原の大神等の御稜威によつて、東洋平和を求めらるゝ上に於ても今尙ほ同一の手段を必要とし、世界平和の爲めには一層之が必要であるとせられて居るのである。

高天原より天孫邇邇藝命が天降ります前に、天菩毘能神、天若日子、雉名鳴女等を偵察に遣はされたが、其の目的を達せられなかつたので、終に建御雷神に、天鳥船神を副へて遣はされたのである。

此の時は神代であり、神靈の作業であることは勿論のことであつて、此の最後の二柱の神は談判の爲め、高天原より出雲國伊那佐の小濱に降り到きて、十掬劍を抜きて浪の穂に逆さまに刺し立て、其の劍の前に踏み坐て大國主神と談判せられたと云ふのである。

此の時大國主神は僕は得白さじ、我が子八重言代主神是れ白すべし、と云ひ給うた故に、八重言代主神を徴し來て問ひ給ふ時に、八重言代主

神は其の父大國主神に「恐し此の國は天神の御子に立奉りたまへ」と云ひて、即ち其の船を踏み傾けて天逆手を青柴垣に打ち成して隠り給うたとあるのである。

又此の時大國主神の御子建御名方神と建御雷神との力競べの如き、正に天津神の御神威の偉大さを現はされたるものであつて、之れによつて此等の御子神等も、此の葦原中國は天津神の御子の命の隨に献らむと云はれたのである。

斯くして大國主神は終に此の葦原中國をば命の隨に献るとし、唯其條件として僕は住所をば天津神の御子の天津日繼知ろしめす如く、底津石根に宮柱布斗斯理、高天原に氷木多迦斯理て治め給はむ、僕は百足らず、八十垌手に隠りて侍ひなむと云はれ、遂に大國主神は當時の葦原中國の靈界たる神仙界の隅に隠り住ひますことになつたのである。

斯くて後、葦原中國の靈界の中に、今日の眞神靈界は形成せられ始めたのである。

即ち天照大御神、高木神の命以ちて、天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇邇藝命の天降らしめられたるが、其の端緒であるのである。而して大和民族の大祖神にまします、高天原なる四魂具足の神、日子番能邇邇藝命の天降りまさむとする時、葦原中國の神仙界の神たる猿田毘古神など御前に仕へ奉らむとして、其の天降りの途中まで御迎へに出でられ給うたのである。

又日子番能邇邇藝命が高天原より天降ります時に、天兒屋命、布刀玉命、天宇受賣命、伊斯許理度賣命、玉祖命等併せて五伴緒を支り加へて、天降らしめ給うたのである。

又後世物質界に遷移して、今現に其の本體の皇室に嚴存して居ると

ころの、八尺勾璣鏡及び草那藝劍をば同じく御降臨の時與へ給うたのである。尙此の際之れと共に八意思兼神、手力男神、天石門別神を副へ給ひて、

「此の鏡は専ら我が御魂と爲て、吾が前を拜くが如く、伊都岐奉れ。次に思兼神は前の事を取り持ちて政爲せよ」

とのりたまうたのである。

此の御神勅は高天原に於て、天照大御神が其の御孫邇邇藝命に與へ給うた御神勅であるのであつて、眞の信仰は敬神崇祖であるべきことを示され、又思兼大神の御神務を示されたのである。思兼大神の此の御神務は現在に於てもお變りはないのである。

其他の神に就ては天兒屋命は、葦原中國の中臣連等が祖となり、布刀玉命は忌部首等が祖とせられ、天宇受賣命は、猿女君等が祖となり、伊斯

許理度賣命は鏡作連等が祖となり、玉祖命は玉祖連等が祖とられた。此等の神は皆天降りまして後、葦原中國の靈界即ち神仙界の神々と同化せられ、自らも神仙靈になられたのである。獨り天津日子番能邇邇藝命は前にも述べたるが如き準備を具へて終に筑紫の日向の高千穂の久志布流多氣に天降り坐した。此の高千穂之久志布流多氣としては、種々なる地點が想像指定せられて居つたのであるが、此の高千穂とは今の日向國西臼杵郡石堂山と稱せられて居る山を云ふのである。此の石堂山と稱ばれて居る山は昨年調査の爲め登山した人の報告によると、古事記に記載せられたるが如く韓國山と相對し、笠沙の御前のあつた今の青島村、鷓戸村の地點を一直線に見透し、朝日の直刺す國、夕日の日照る國であるとのことである。

日子番能邇邇藝命が天降りしました時の御年齢は何歳位であられた

らうか。父神天忍穗耳命あめのしのほみみが一旦天降りかけられて天之浮橋に多多志水穂國は伊多久佐夜藝いたくさやぎ且有りけりと告り給ひ、更に還り上り給ひて後に成りました御子であるとして古事記には記載せられてある。故に其の後古事記に現はれて居るだけの歲月としても、天菩毘能神あめのほひのかみが三年、天若日子が八年、それより雉名鳴女きしななめを遣はされて、天若日子の射殺されたる大事件があり、又詮議の末建御雷神たけみかづちのかみ、天鳥船等が遣はされて、大國主神一族を平定せしめ給ふにも相當年月を要せられたのである。故に邇邇藝命が天降りませし時には、相當の齡よわひを召して居られたには相違ない。神靈には年齢はないけれども、決して幼兒には在らせられず、二十歳前後と云ふべきであつたと思はれるのである。

神仙靈界に天降り遊ばしたる邇邇藝命は、神仙靈であつた猿田毘古神を遠ざけられ、宇受賣神も之れと伴せらるゝ様に命せられたのである。

る。

青年の有様を以て天降り遊ばした日子番能邇邇藝命は、笠沙の御前に於て麗しき美人であられし、大山津見神の女神阿多都毘賣あまたつひめ、亦の名は木花之佐久夜毘賣きはなのさくやひめと一宿婚ひとよめあははしたまひて後、木花之佐久夜毘賣は姪ひんしんせられた。然るに邇邇藝命が、一宿にや姪ひなめる御子は我が子に非ずとのりたまうた爲め、木花之佐久夜毘賣は戸無き八尋殿やひろどのを作り、其の殿内に入りまして土以て塗り塞ふさぎ、其の殿に火を著つけて産みました。其の火の盛りに燃ゆる時に成りませる御子は、火照命ほてるのみことである。

此の火照命は日子番能邇邇藝命の御魂が最初に成りました御子であつて、之れは日本民族の最初の氏の祖みまの神として、大隅、日向、薩摩の國の氏神益救神社の神と云ふのである。

此の益救神社の神には三柱の御子神があつた。此の御子等には邇

邇藝命の魂が成りましたのであつて、皆日本民族の氏の祖の神である。鹽津神社の神、波良波神社の神、土地神社の神が其の御子であるのである。其の中で古事記に載せられて居るのは火須勢理命と申す御子のみであつて、之は即ち土地神社の神である。更に又此の神の御子に邇藝命の御魂が成りまして、大和民族の氏の祖の神となられたのである。即ち兄神は火遠理命と申し、大和民族の氏の祖の神としては、秩父神社の神と申し上げ、弟神は天津日高日子穗穗手見命と申し、大和民族の氏の祖の神としては、眞幡寸神社の神と申し上げるのである。

此の天津日高日子穗穗手見命は其の兄火遠理命の爲めに、鉤の問題で随分困しめられた神である。之れが爲めに海邊に泣き患ひて居る、時に鹽椎神に教へられて綿津見神の宮に到り、其の海神の女豊玉毘賣と目合まし其の父神は終に之を婚はせまつられた。天津日子神

と海神の結婚は之れが初めであつて、綿津見神の宮に居らるゝこと三年の内に、豊玉毘賣は姪み給ひ、此の豊玉毘賣が海原より本土に出で來られて生みまつり坐したのが、天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命であつて、此の神は日本民族の氏の祖の神としては山城の八坂神社の神である。

斯くして邇藝命の御魂は百六十八柱の御子神等の御魂と成りまして、大和民族の氏の御祖の神となられたのである。大和民族は此等の神がアイヌ民族を同化し給ふによつて生じたのである。此等の民族は其の一系列の神によつて支配せられて居た。此の時代の大和民族、換言すれば神代時代の大和民族をば、名けて蝦夷民族と云ふのである。而して此の時代に同化せられたる大和民族即ち蝦夷民族の中にも、同化せざるアイヌ民族が多數に存在して居たのである。其の民族の中

にて支配權をもつて居られたのは、邇邇藝命の御魂の成りました御子等中の或る神等であつたのである。

或る古記録によれば、其の當時の神代の系統の神は、火照命より七十一代續いた様である。又通常云はれて居る彦五瀬命、稻氷命、三毛入野命、若御毛沼命等の父神は天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命にあらずして此の神代の天照國照百日出杵不合命であると思ふのである。

今此の御四方の御子等の運命に就て考察するに、長男に在す彦五瀬命及び第四男若御毛沼命亦の御名神倭伊波禮毘古命は人代に出で人皇として天業を恢宏せられたに拘はらず、第二男稻氷命は妣の國として海原に入りまし第三男の三毛入野命は波の穂を跳みて常世國に渡りましたとあるによつて見れば、此の二方の御子は即ち尙ほ靈的生活即ち神代生活を續けられたのであると思ふ。

以上の如き經過を取つて神代は人代となり、人は皆物質の生活を爲すに至つた。然れども其の半面には依然として靈的世界即ち非物質の世界に、靈的の生活即ち精神的生活をするものはあつたのである。

斯くして此の時代に於ける葦原中國には人及び動植物の生息せる物質世界と、靈體の生息せる靈界との區別があり、靈界には前の黄泉國たりし妖魅界、アイヌの祖神等及び其の他の神仙靈等の居給ふ神仙界及び邇邇藝命の直系たる眞神靈等のまします神靈界の區別があつたのである。

一一、人代記

一四六

神倭伊波禮毘古命は其の兄彦五瀬命と共に日向の高千穂の石堂山の宮に坐して、神代より人代に移行せし状態を観察せられ、神代に神を父とせらるゝ二方の御子等は、東の方日本本土の中央に出で、天下の政をなさむと、日向を出立し給うた。此の時は世は神代より人代になつて居ても、日本本土には未だ同化せざる大國主神時代の民族或はそれ以前の民族、又或る天降り給うた神によつて同化せられたる氏族等が、各地に占居して居るものと考へ進ませられたのである。其の途中の經路に就ては、種々なる文書に記載せられたる通りであるから之を略するが、唯浪速の波を經、日下之蓼津に於て登美毘古と戦ひたまうた時に、彦五瀬命は痛矢串を負はされ、終に紀國の男之水門に到りまして

崩りましたのである。

之れより神倭伊波禮毘古命は御獨りで軍を従へられ、熊野村を經て進まれた。其の際高天原の天照大御神、高木神は之れを守護して居られた。此の時は既に人代であつて、人としては神代に於けるが如く神とは自由に交通が出来なくても、神は神界より守護し給うて居られたのである。此の御子等の御東征の如きも二方の御子等の計畫の如く見えるけれども、恐らくは高天原の神々の大命であつたのであると思ふのである。

皇軍をば此れにより益々奥地に進むるに當りては、高天原の高木大神よりは導き人として八咫鳥なるものを遣はされたが、之は人であつて鳥ではないのである。其の人の導きの隨に進まれ、種々なる國津神と稱する、大國主神の同化をも未だ蒙らざりしものを皆服従せしめら

一四七

れた。夫れより進まるゝ際にはアイヌ民族として相當の文化を以て待ち撃たんとするものにも遭遇せられた様である。

又忍坂の大室に於て一擧に尾のある土雲八十建を打殺し給ひしが、此の土雲族の如きはアイヌ民族以前の種族であつて、同化の價値がなかつたから之を征伐せられたのであると思ふ。

斯くして終に此の地方の平定も了る頃、邇邇藝命よりはすつと後ではあつたが、高天原より此の地方に天降り居坐して、彼の登美毘古の妹登美夜毘賣に娶ひて宇摩志麻遲命を儲けられて居た邇邇速日命は、神倭伊波禮毘古命をば天津神の御子として聞き及んで、參降り來つたのであつた。

是によつて之を觀れば、高天原に於ても天照大御神は天津神として特殊の位置にあられたのである。併し四魂具足の尊き神は天照大御

神等のみであつて、他の神々は皆四魂不具足であつたのである。邇邇速日命も亦それであつて、其の子たる宇摩志麻遲命の後裔である物部連穗積臣、嫁臣等が後に種々なる事件を生ずるに至つたのは、此れが爲めであつたと思ふ。

此の如く荒ぶる神等を言向け和し、不伏人等を退撥げて後、大和の畝火の白檮原に都せられ、天の下を治しめされたのである。此れは始めて茲に都せられたのではなく、筑紫の日向の高千穂の都をこゝに遷都せられ坐したのである。遷都後の大日本帝國としての神武天皇の紀元元年はこゝより始まつたのである。

神倭伊波禮毘古命は既に日向に坐しました時、阿多の小椅君の妹名は阿比良比賣を娶して多藝志美美命と岐須美美命の二方の御子があつた。然れども更に大和國に於て大后とならるべき美人を求ぎたま

ひ、富登多多良伊須須岐比賣、亦の名比賣多多良伊須氣余理比賣を娶ひました。而して比賣との間に日子八井命、神八井耳命、神沼河耳命の三人の御子を儲け給うたのである。皇統は此の三人の御子の中で神八井耳命が御繼ぎ遊ばされたのであつて、之れを人皇第二代の綏靖天皇と申し奉るのである。他の兄弟御二方は共に多數の連、臣、造、直等の祖となられたのである。此れ即ち同化政策であるのである。

綏靖天皇には一子師木津日子玉手見命ありしのみで、此の御子は皇位を御繼承遊ばして第三代安寧天皇となられたのである。

安寧天皇は阿久斗比賣を娶ひて三方の御子があつた。中の大倭日子鉏友命が皇位を繼承せられ、兄の常根津日子伊呂泥命も、弟の師木津日子命も唯民族を同化遊ばした様である。

大倭日子鉏友命は第四代懿德天皇にして、飯日比賣を娶して二方の御子があり、長男御眞津日子訶惠志泥命は皇位を繼承せられ、次男多藝志比古命は血沼之別、多遲麻之竹別、葦井之稻置の祖となられたのである。

御眞津日子訶惠志泥命は第五代孝昭天皇であつて、天皇は余曾多本比賣命を娶して二方の御子を儲けられた。弟大倭帶日子國押人命は皇位を繼承せられ、兄の天押帶日子命は春日臣、大宅臣、栗田臣、小野臣、柿本臣、壹比韋臣、大坂臣、阿那臣、多紀臣、羽栗臣、知多臣、牟邪臣、都怒山臣、伊勢飯高君、壹師君、近淡海國造の祖であり、此等の多數の臣、君、國造の祖なるが故に、天押帶日子命をば今小野神社の神として奉祀して居るのである。又之れは殊に小野氏に多數の學者が出られた爲めもあつたのであると思ふ。併しながら之は眞の日本民族の祖の神と云ふことにはならないのである。

大倭帶日子國押人命は孝安天皇として忍鹿比賣に娶ひたまひ、二方の御子大吉備諸進命、大倭根子日子賦斗邇命を儲けられたが、弟の大倭根子日子賦斗邇命は天下を治められた。

大倭根子日子賦斗邇命は孝靈天皇として皇位を御繼承遊ばされ、此の天皇には大倭根子日子國玖琉命、千千速比賣命、夜麻登登母曾比賣命、日子刺肩別命、比古伊佐勢理比古命亦、名大吉備津日子命、倭飛羽矢若屋比賣命、日子寤間命、若日子建吉備津日子命等八方の御子があり、大倭根子日子國玖琉命は皇位を繼承せられた。他の御子等の中で、大吉備津日子命は吉備上道臣の祖となり、若日子建吉備津日子命は吉備下道臣、笠臣の祖となり、日子寤間命は針間牛鹿臣の祖となり、日子刺肩別命は高志之利波臣、豊國之國前臣、五百原君、角鹿海直の祖となられた。

大倭根子日子國玖琉命は孝元天皇として八方の兄弟の中より擧げ

られて皇位を繼承せられ、御子大比古命、少名日子建猪心命、若倭根子日子大毘毘命、比古布都押之信命、建波邇夜須比古命の五方を儲けられたのであるが、此の中で、天照大御神とは關係なき邇藝速日命が登美毘古の妹登美夜毘賣に娶ひて生みませる子の宇摩志麻遲命の後裔にして、穗積臣等の祖である内色許男命の妹内色許賣命の御子たる、第三男若倭根子日子大毘毘命は皇位を繼承せられたのである。兄の大比古命には二方の御子があり、長男建沼河別命は阿倍臣等が祖であり、次男比古伊那許志別命は膳臣の祖である。

孝元天皇が更に内色許男命の女、伊賀迦色許賣命と娶ひて生みまし、た御子たる比古布都押之信命は、種々有力なる氏族を同化せられたのである。今其の詳細を記録すれば、

比古布都押之信命が葛城之高千那比賣に娶ひて生みませる子、味師

内宿禰は山代内臣の祖であり、山下影日賣に娶ひて生みませる子建内宿禰は建内家の祖であつて、九方の男女子あつて大いに榮え給うた。即ち長男波多、八代宿禰は波多臣、林臣、波美臣、星川臣、淡海臣、長谷部君の祖であり、次男許勢小柄宿禰は許勢臣、雀部臣、輕部臣の祖であり、三男蘇賀、石河宿禰は蘇我臣及び川邊臣、田中臣、高向臣、小治田臣、櫻井臣、岸田臣等が祖であり、四男平群都久宿禰は平群臣、佐和良臣、馬御楳連が祖である。五男木角宿禰は木臣、都奴臣、坂本臣等の祖であり、次に長女久米能、摩伊刀比賣あり、次女怒能伊呂比賣あり、次に六男葛城、長江、曾都比古は玉手臣、的臣、生江臣、阿藝那臣等の祖であり、七男若子宿禰は江沼間臣の祖であるのである。

若倭根子日子大毘毘命は開化天皇として皇位を繼承せられ、天皇には比古由牟須美命、御真木入日子印惠命、御真津比賣命、日子坐王、建豊波

豆羅和氣王の五方の御子ありしが、御真木入日子印惠命は皇位を繼承せられた。

御真木入日子印惠命は崇神天皇として皇位を繼承せられたが、天皇と同じく開化天皇の御子たる、崇神天皇の御兄弟は種々な問題を起されたことを見るのである。今其の御兄弟の關係を述べれば、

兄比古由牟須美王には大筒木垂根王、讚岐、垂根王の二方の子あり、此の二方に尙五方の御子等があつたと云ふ。又弟日子坐王には大俣王、小俣王、志夫美宿禰王、沙本比古王、袁邪本王、沙本比賣命、室比古王、美知能、宇斯王、水穗、真若王、神大根王、水穗、五百依比賣、御井津比賣、山代之大筒木、真若王、比古意須王、伊理泥王等、日子坐王の子だけで十五方あつたのである。就中大俣王の長男曙立王は、伊勢之品遲部君、伊勢之佐那造之祖であり、次男菟上王は比賣陀君の祖であり、小俣王は當麻勾君の祖とな

り、志夫美宿禰王は佐佐君の祖となり、沙本比古王は日下部連、甲斐國造の祖となり、袁邪本王は葛野之別、近淡海蚊野之別の祖となり、室比古王は若狭之耳、別之祖となり、美和能宇志王には比婆須比賣命、真砥野比賣命、弟比賣命、朝廷別王の四方の御子あり、朝廷別王は三川之穂、別の祖であり、水穂真若王は近淡海之安直の祖となり、神大根王は三野國之本巢、國造、長幡部連の祖となり、山代之大筒木真若王が同母弟伊理泥王の女、丹波能阿治佐波比賣に娶ひて生みませる加邇米雷王、此の王高材比賣に娶ひて生みませる息長宿禰王の子息長帶比賣命、虚空津比賣命、息長日子王の三方にして、息長日子王は吉備品遲君、針間、阿宗君の祖である。又息長宿禰王が河俣、稻依比賣に娶ひて生みませる子の大多牟坂王は、多遲摩國造の祖である。又崇神天皇の最末弟たる建豊波豆羅和氣王は、道守臣、忍海部造、御名部造、稻羽忍海部、丹波之竹野別、依網之阿毘古等

が祖である。

以上の如き複雑なる家庭の中に於て、御真木入日子、印惠命は崇神天皇として皇位を御繼承せられ坐した。此の天皇には豊木入日子命、豊鉦入日賣命、大入杵命、八坂之入日子命、沼名木之入日賣命、十市之入日賣命、伊玖米入日子伊沙知命、伊邪能真若命、國片比賣命、千千都久和比賣命、伊賀比賣命、倭日子命等十二方の御子あり、就中伊玖米入日子伊沙知命は皇位を繼承せられ、豊木入日子命は上毛野君、下毛野君等が祖となり、大入杵命は能登臣の祖である。

伊玖米入日子伊沙知命は垂仁天皇として皇位を繼承され、御子品牟都和氣命、印色之入日子命、大帶日子淤斯呂和氣命、大中津日子命、倭比賣命、若木入日子命、沼帶別命、伊賀帶日子命、伊許婆夜和氣命、阿邪美都比賣命、袁邪辨王、落別王、五十日帶日子王、伊登志別王、石衝比賣命等十六王あ

つた。其の内大帶日子淤斯呂和氣命は皇位を繼承せられ、其の直きの弟大中津日子命は山邊之別、三枝之別、稻木之別、阿太之別、尾張國之三野別、吉備之石無別、許呂母之別、高巢鹿之別、飛鳥君、牟禮之別等の祖である。伊許婆夜和氣王は沙本穴太部之別の祖であり、落別王は小月之山君、三川之衣君の祖となり、五十日帶日子王は春日山君、高志池君の祖であり、石衝別王は羽咋君、三尾君の祖となられた。

此の天皇と后沙本比賣命との關係及び、其の間の子たる品牟都和氣命に就ては、實に小説的なる歴史が遺されて居るが、此の沙本比賣命は開化天皇が、丸邇臣の祖、日子國意都命の妹意都都比賣命を娶して生みませる御子の日子坐王なる崇神天皇の弟である王が、春日建國勝戸賣の女、沙本之大閼見戸賣に娶ひて生みませる御子である。丸邇臣とは大和國添上郡櫛本村の土族であつたのである。

其の御子品牟都和氣命の聾啞にましませしを治さんとして、天皇は種々苦心せられた様である。所謂妙な神の信仰をもせられた様である。又出雲之石碯之會宮に坐す葦原色許男大神(大國主神の別名)をも信仰せられた。御子が肥長比賣に婚ひましたとき、其の美人の比賣は蛇であつたと傳へられて居る。此時から我が天皇が先住民族の祖神を大いに崇拜せらるゝに至つたやうである。

大帶日子淤斯呂和氣命は景行天皇として皇位を繼承せられ、此の天皇には櫛角別王、大碓命、小碓命、倭根子命、神櫛王、若帶日子命、五百木之入日子命、押別命、五百木之入日賣命、豊戸別王、沼代郎女、沼名木郎女、香余理比賣命、若木之入日子王、吉備之兄日子王、高木比賣命、弟比賣命、豊國別王、眞若王、日子人之大兄王、大枝王等二十一の皇子女があつた。此の外に古事記に記載せられざる御子が五十九王あつたとのことである。

此の八十方の御子の中、若帶日子命及び小碓命即ち倭建命、五百木之入日子命の御三方は太子の名を負はれ後、若帶日子命は天下を治め給ひ、他の七十七方は悉く國造、和氣、稻置、縣主に別け給ひ、櫛角別王は茨田下連等の祖となり、大碓命は守君、太田君、島田君等の祖となり、神櫛王は木國之酒部、阿比古、宇陀、酒部の祖となり、豊國別王は日向國造の祖となられた。又大碓命の御子押黒之兄日子王は三野之宇泥須和氣の祖となり、押黒弟日子王は牟宜都君等の祖である。

此時に於て注意すべきは大和民族の同化は、大日本帝國となつて大に行はれ、既に景行天皇時代には八十餘人の御子が坐しましても、僅かに其の中六方の御子等のみが氏族の祖となられた様の状態であつたのである。

景行天皇の時の出來事として茲に記述すべきは、後世のものによつ

てなされたる、倭建命に草那藝劍を賜うたとの記事である。此は實際三種の神器の草那藝劍ではないのである。三種の神器の神聖を汚さんと欲して斯様の惡事を働くものがあつたのである。

景行天皇の御子若帶日子命は成務天皇として皇位を繼承せられ、和訶奴氣王と稱する一王子があつたけれども、人皇第十四代は倭建命の御子、帶中津日子命が仲哀天皇として皇位を繼承せられ坐した。

倭建命には仲哀天皇の帶中津日子命の外五方の御子があつたが、其の中稻依別王は犬上君、建部君等が祖となり、建具兒王は讚岐、綾君、伊勢之別、登袁之別、麻佐首、宮首之別等が祖となり、足鏡別王は鎌倉之別、小津石代之別、漁田之別の祖となられた。

帶中津日子命は仲哀天皇として天下知らしめし、香坂王、忍熊王、品夜和氣命、大鞆和氣命の御子あり、大鞆和氣命は又品陀和氣命と云ひ、御母

は息長帯比賣命の所謂神功皇后であつて、よく歸神し給うた命である。抑も「かむがしり」は眞神靈以外の神のなしたる神事である。此の時代には神仙靈の信仰は盛んになつて、大和民族の祖の神は稍々顧みられざらんとするの傾向があつた様である。例へば「今如此く教へたまふ大神は其の御名を知らまく欲し」とまをせば、即ち答詔へたまひつらく「是は天照大神の御心なり亦底筒男、中筒男、上筒男三柱の大神なり」など云はれて居るを以て見れば、當時の信仰の状を想像し得ると思ふ。即ち「天照大神」と稱した神は決して「天照大御神」ではないのである。而して此の時に天神、地祇、亦山の神、河海の諸神に悉に幣帛を奉られたとあるを以ても知るべしであると思ふ。

また此の時に建内宿禰は其の太子品陀和氣命を越前にお連れ申上げて伊奢沙和氣大神を祭り、御食津大神と號した。今は氣比大神と謂

うて居るのである。

品陀和氣命は應神天皇となり給うたのである。此の時代に於ては皇統を以ての民族同化は既に衰へ、天皇には御男子は十一方ましましたが、唯大山守命が土形君、幣岐君、榛原君等の祖となり、又若野毛二俣王の子、意富富杼王が、三國君、波多君、息長君、坂田酒人君、山道君、筑紫之米多君、布勢君等が祖となられたのみである。

人皇としての大和民族同化は此の時より停止せられ、先住民族祖神の信仰が大いに始まつたやうである。民族魂の作用の差は信仰によつて次第に滅して來かゝつたのであると思ふ。

應神天皇の時代に於ては、民族同化機能は既に其の必要なきものゝ様であつたが、此の時代に於て見落す可らざるものは儒教の輸入であるのである。

天皇の時代に百濟國王照古王は牡馬壹疋、牝馬壹疋を阿知吉師に付けて上られた。此の阿知吉師は阿直史等が祖であり、亦其の際横刀及び大鏡とを貢上つた。而して又百濟國に若賢人あらば貢上れと科せられた處、此の科によつて貢上られた人は和邇吉師であつて、論語十卷千字文一卷并せて十一卷を貢進られた。此の和邇吉師は文首等が祖であり、此の時同時に秦造の祖、漢直の祖、及び酒を醸むことを知れる須許理等も來つたのである。此れより我が國の儒教思想は大いに發達したのである。

一一、佛 教 傳 來

前章に應神天皇の時儒教の傳來せることに就て簡単に記述したが、佛教の傳來は此れより後であつて、何人もよく知れる如く、人皇第二十九代欽明天皇の御世である。今其の有様を大日本史を參考として記述すれば、大略次の如くである。

欽明天皇の十三年壬申冬十月百濟王明使を遣はし、金銅釋迦佛像、及幡蓋經論を献じ、上表して佛の功德を讚述した。天皇其の禮すべきや否やを疑つて、議を群臣に下された。其の時蘇我稻目は奏して、宜しく之を禮すべしと云ひ、物部尾輿、中臣鎌子は俱に奏して禮す可らずと云うた。天皇は物部、中臣等に賛し給うて、佛像をば蘇我稻目に賜うた。處が蘇我稻目は自分の向原の家を捨て、寺と爲した。此時諸國に大

疫あり久しくして愈々甚だしいものがあつた。之れが爲め物部尾與中臣鎌子は奏して云ふには、疫病の起るは實に佛の致す處である。故に宜しく其の像を屏棄して禍根を絶ち後福を求むべしと奏上した處が、詔して之を許された。そこで有司に命じて佛像を難波の堀江に投じ、火を放つて伽藍を焼かしめられた。

翌十四年癸酉夏五月茅渟海大いに鳴りて光有り、溝邊直に敕して海に入り之を見せしめた處、乃ち樟木を獲た。よつて工に命じて佛像二軀を造られた。

斯くして一方に佛教の輸入のあると同時に、醫學、易學、曆學、藥學等の諸學者相次で來朝したのであつた。此時は獨り百濟人のみではなく、天皇の二十三年壬午の八月には吳人智聰なるもの儒釋方書明堂圖等百六十四卷佛像樂器等を齎して來たと云ふのである。

天皇の三十一年庚寅春三月大臣蘇我稻目は薨じ、次で其の子蘇我馬子大臣となつた。

人皇第三十代敏達天皇の六年、丁酉冬十一月、百濟王は經論若干卷、并に律師、禪師、比丘尼、咒禁師、佛工、寺工、等を献せられた。天皇は詔して之れを難波の大別王寺に置かれたと云ふことである。

又天皇の八年、己亥冬十月には新羅も亦佛像を献じたと云ふのである。

其の後天皇の十四年乙巳春二月疫疾流行し民多く死した。三月朔、大連物部弓削守屋、大夫中臣勝海等奏して言すには、佛法興行し疫疾は愈々甚だし、嚴に其の法を禁斷することを請ふと。然るに詔して之をゆるされ、直に佛像塔殿を焼き、餘像をば難波の堀江に棄てられた。是の時又京師には瘡を患ふもの多く、死者は夥しく出來た。爲めに民間

に訛言あり、是れ佛像を焼くの致す處であると云ふものもあつた。其の夏の六月には蘇我馬子も亦、病によつて天皇に佛三寶を奉せんと請うた。天皇は素より文史を好んで佛法を信せざるが故に、馬子に詔して汝獨り之を爲して他人を惑すなかれと云はれた。

敏達天皇崩御せられて後、用明天皇即位せられ、御在位僅か一年に満たなかつた。天皇は即位二年丁未夏四月磐余河上に新嘗せられ、此の時病を得て宮に還り給ひ、群臣に詔して朕三寶に歸せんと欲す。卿等之れを議せよと曰はれた。此の時物部守屋、中臣勝海は、佛は蕃神にして敬するに足らずと奏したが、蘇我馬子は詔旨を奉戴し僧を引いて宮に入つた。是に於て守屋と馬子との葛藤次第に甚だしく、馬子は窃かに兵を集め、守屋、勝海も亦兵を聚めて自ら守つたが、勝海は迹見赤檮の爲めに殺されたのである。

佛教渡來當時蘇我氏一族と、物部氏、中臣氏との間には非常なる意見の相違があつたやうであるが、之に就て試みに今此の三氏の民族的關係を調査すれば、大略次の如くであることを見るのである。

蘇我氏の祖は蘇賀石河宿禰である。蘇賀石河宿禰は人皇第八代孝元天皇が、穗積臣の祖である内色許男命の女、伊賀迦色許賣命を娶して生みませる御子、比古布都押之信命が、木國造の祖たる宇豆比古の妹、山下影日賣に娶ひて生みませる御子であるところの建内宿禰の子であるのである。而して蘇我氏は其の後裔である。

此の蘇我氏の傍系の祖たる内色許男命は穗積臣等が祖であり、穗積臣の遠祖は邇藝速日命が登美毘古の妹登美夜毘賣に娶ひて生みませる御子、宇麻志麻遲命であるから、蘇我氏は宇麻志麻遲命より種々變化し來れることを見るのである。

之れに反し、物部氏は宇麻志麻遲命の直接の後裔であつて、神武天皇以來服従せられて居る氏族であり、中臣氏は天兒屋命を祖として居るものである。斯くの如く系統的に大なる差違あることが各氏族間の葛藤と大いに關係があると思ふのである。日本民族にして敬神崇祖の信仰を遠ざかり、所謂蕃神信仰をなせる原因には民族的關係があつたのであると思ふ。

併しながら氏族と祖神との關係は儒佛の輸入以後大いに變化せられ居ることを見るのであつて、今日の記録に存するものは決して信を置くに足らぬものが多い。何となれば人代となりてより以後、氏の祖の神を祖神として信仰奉祀することが大いに遠ざけられ、之に代つて先住民族の祖神を祀るの習慣が行はれたからであるのである。尙ほ之に加ふるに後世、時の權力を以て勝手に祖神を造りたるものが其の

例に乏しからざるのである。

一三、三種の神器

一七二

現行皇室典範第二章の踐祚即位の條下第十條に、天皇崩するときは皇嗣即ち踐祚し祖宗の神器を承くとあることは何人も知る處である。此の祖宗の神器と云ふことに就ては、茲に詳細に説述するの要ありと思ふのである。

現代に於ては祖宗の意味を、極めて簡単に考へて居る人が多い。殊に物質科學にのみ心酔し、物質ありて非物質あるを知らざるものは、人代あるを知つて、神代ありしを信じないのである。此等の人は祖宗とは只單に神武天皇以後の御歴代を申上げるかの如く考へて居り、それより深くは考へないのである。併し此の祖宗の神器を承くると云ふことは、獨り明治大帝が始めて之を定められたのではない。御代々の

天皇は皆之を行はれ、歴代相次いで何れも祖宗の神器を繼承せられ給うたのである。

然らば人皇第一代の神倭伊波禮毘古命と稱へ申す神武天皇は、如何なる祖宗の神器を繼承せられ給うたか。我々大和民族としては是非之を明かにせねばならぬのである。現時物質科學の一端に心酔し、或は外來宗教を信仰して居るものは、動もすれば吾が國の古典を輕視するものあれども、現に帝室に於かせられて尊重し給へる神器の由來を明かにする爲めには、古典によらねばならぬのである。

神器は日本民族の天皇が皇位と共に奉持しまつらるゝ處のものであつて、人代に於て人の造りたるものではない。神代に於て既に御物なりしが故に之を神器と云ふのである。大日本帝國人皇第一代の神武天皇は、神代に於て皇兄彥五瀬命と共に之を承けさせられ、人代に出

で、人皇第一代の天皇となられたのである。

然らば神代に於ける神器の起源は如何と云ふに、神代に於ける神器は、神器を繼承することを天皇の御本分とし、民族同化の起源と一致するものである。之れによつて、人代に於て日本帝國を形成せる所謂大和民族は、神代と連続せるものであることを知らねばならぬ。故に神器の起源に就て知ることは、大和民族の眞意義を知る唯一の途であるのである。之を知ること欲せず、之を知らずしては我國の教育者たるの資格は全然無きものと云はねばならぬ。

神代に於て大國主命が日本國土を葦原中國と稱して統治して居られたものをば、高天原なる天照大御神は御子孫を以て之を統治せしめんとせられ、大國主命も終に之れに同意せられて、皇孫邇邇藝命は命を奉じ高天原より、此の葦原中國に天降りまさんとせられたが、其のとき

天照大御神は五伴緒を併せて加へ、且つ其の遠岐斯八尺勾璣鏡及草那藝劍に神等を副へ賜ひて、此の鏡は専ら我が御魂と爲て、吾が前を拜くが如く伊都岐奉れと詔りたまうた。此の八尺勾璣鏡及び草那藝劍は即ち今日三種の神器と稱するのである。尙ほ邇邇藝命は神代に於ける大和民族の祖であつて、其の大祖神は無論天照大御神であるのである。

斯くて邇邇藝命の御子孫が神代に於て、先住民族を同化せられたるものを蝦夷民族と云ふのであつて、同化によつて成立したる蝦夷民族は、邇邇藝命の御魂の成りました代々の御子孫の一柱を君主として奉戴して居たのである。此等の蝦夷民族の中には服従はすれど同化せず、人皇時代になつて謀叛するものも尠くはなかつたやうである。

蝦夷時代が神代として連続した間は随分長かつたやうである。而

して神代が人代に移行せる時期、即ち人代の初め所謂人代の黎明期は、地球上各地多少の遅速のあつたことは記録によつてもわかるが、大體一様であつたやうである。三種の神器とは關係はないが、此の事に就て少しく記して見たい。

日本に於ける人代の初めたる所謂黎明期に到達したのは、紀元元年より少し以前の頃である。神武天皇は此の神代の終りに、人代の初めたる所謂黎明期が到達したので、日向の高千穂を御出立遊ばしたのである。

印度に於ける釋迦の出現は、日本の紀元前約三百年の頃であつたと云ふ。即ち釋迦の傳記は人代となつた後に於て人が作つたものである。勿論諸の經文も亦人によつてつくられたものである。夫れは佛滅後凡そ百年の頃である。

支那に於ても孔子、老子、子貢、顔回、孟子、東漢の光武帝までは神代であつたとのことである。ギリシヤのソクラテスの生れた時代も亦神代であるが、プラトーンは人代である。此の兩者の間に神代から人代への移行期、所謂人代の黎明期があつたと考へてよいのである。

基督の生れた時も亦神代であつて、夫れより約二百年後に人代となつたのである。

モハメットも亦神代のものであつて、基督と約三十年の差ありと云ふ。

凡て何れの國に於ても、神代が人代に移行する時の移行時代、即ち混合時代は随分長かつた。而して支那は最も其の混合時代の長かつた國のやうである。此の移行期をば、神は非物質のエーテル界より觀察せられて居たのである。エーテルは宇宙間に充滿し、其の中に物質が